88-236

帝國圖書館藏

つくし

文學士 上田敏

明治三十五年一月文科大學

池のほとりの庵の藤に
[illegible]の風雅、語らひし
日をおもひて、この書を
わが友秀木平田氏に獻ず。
不忍のあに忍ばざらめや。

はしがき

海のあなた、佛、伊、獨、露、米、西の藝苑に、ちかき世の逸品と仰がるゝ短篇十數種、こゝになつかしきわが倭の言葉に和らぐ。抑も近代の文字、彩ゆたかに調も繁けく、あるは、幽かなるにほひに、琴笛のねしみ〴〵と覺ゆるもの多かり。人情のきはみを盡し、世姿のまことを寫して、たけ高く、いたりも深きこれらの妙文を移さむとすれば、いきほひ、古言を復活し、新語を創作して、聲調の起伏、餘韻の搖曳に考へ、舊態の樣式を離れざるべからず。され

ば、人よ、ひとへに晦澁の譏を以て、この書に擬するに先ち、少しく原文の深邃に思あたらせたまへ。澎湃たる近代の思潮、きばやく、輕びやかに解しうべけむや。

巻のをはりの二篇はみづからの文なり。六樹園が「都の手振」に窺ふべき言の葉の巧にあらず、前世紀佛蘭西一抒情詩人の「夜の歌」に現はれたる心にもあらず、たゞ、かりそめのそゞろ言、伶人のいはゆるふあんたじや、あるは、繪だくみのえちうどなるべし。

明治卅四年十二月　東京　上田敏

海潮音

目次

○鐘樓……一
○艶女物語……一〇
樂聲……二四
△まぼろし……五四
屠牛……六四
足弱車……六九

文反古……八五
ゐろり火……九一
○南露春宵……一〇二
露西亞の大野……一〇四
散文詩……一一二
田舍世界……一一二
山靈……一一六
祈禱……一一九
老嫗……一二〇

犬……一二四
わが敵……一二五
物乞……一二七
滿足……一二八
處世法……一二九
戰はむ哉……一三〇
たとへ草……一三一
あけぼの……一三二
眠……一三四
班鳩のはじめ……一三六

孤島……一三九
四季賦
春……一七四
夏……一七四
秋……一七八
冬……一八六
みじか夜……一九一
よひやみ……一九六
……二〇八

冷標

明治文庫

鐘樓

文學士　上田　敏

やよひになりて、ビアシェは戀の熱に燃えたり。まどろみもなき二夜三夜は、總身にたとしへなき歡び濺り、千萬の木芽、肌をついて、つのぐみわたるやうに、あやしの屋根うらのすまゐよりも、物とはなしに、妙香のぼりきて、巴旦杏の花ざかりにも似たりや。

バルバラ上人もみそなはせ。始めてゾルフィナを見てしときをとめは巴旦杏のしづ枝にゐよりて、海のかた、眞帆あげて走る船をながめ、日

にうなづける白ばなのかざしゆかしく、麻の花盛につゝまれ、眼ざしのうるはしさ葉鶏頭の如くなるに、心もまた花にみちけらし。

春の光を帶びたるこの幻は、ピアシェがすさまじき獨寢の手枕に通ひぬ。かくてアドリヤの海の磯かけて、東雲はやもあけゆけば、かれは起きあがりて、鐘樓の軒、海燕の巣ふあたりにのぼりぬ。

空はそこはかとなく、おぼつかなき吐息のやうなる音にみちて、若葉のさゝやぎのやうに、わか枝のそよぎのやうに、鳥の羽ばたきのやうなり。低き家は、まだねむりのうちなれど、半めざめたる牧場は、朝霧のとばりのはしより透きて、靜けき湖のほとりの木立、そよがせに點頭づき、灰色のそらに遠山は淡くみえがくれつ、前なる海は影くろき船を浮べて、はがねの帶の如くふるへ、すべての上には、清くすみたる蒼空の靜平ありて、星はひとつ、ひとつ消えゆかむとす。

腰に精妙の彫ある、青銅の三鯨鐘は、朝の心に勝閧の調送らばやと、ピアシェの手を待ちたり。ピアシェは綱をとりぬ。はじめのひとふりに、巨鐘ラ、ルウヅは、息深き鯨音洩し出で、前後の動搖に、金聲の波をうたし、甍に傳ひ、風にのり、野づらを横に、磯濱あたり、音はます〳〵ひろがりぬ。このとき青銅は、戀に暴びたる狂亂の巨人の如く、口を海づらに開きて、左右にふるへ、遠長きつぶやきに消ゆる大音のふしつくるや、飜て清明の序破急に變り、おほぞらに放れゆく搖曳の響すゞやかなり。塔のしたには音聲の波、春光のそれと合し、遠里はるかに日影をおひゆけば、烟の如くこめたる朝のもやも、曙の榮にとけて黄金の色を染め、連山さながら磨きたる銅の姿なり。

忽にして、清亮の聲はつぶやげる沈靜のうちに破れぬ。若鹿の情極れる叫の如く、ラ、ストリイジの鐘樂は鋭し。續ては、またラ、シャントゥウス

の急聲、華やかに澄みて、玻璃圓閣の上に霰たばしると聞くとき、遙に山々の鐘はつき出でぬ。十寺十五寺の金口、青野に響くは朝のにほひの歡びの歌を田のもに捧ぐるにあらずや。」

鐘の響はピアシェを醉心地にす。網をとりてましらの如く、宙にかゝりて、ラ、ルウヴの力にふられ、高きにのぼりて、ラ、シァントゥウスの餘響を捉へむとするに、額の大痍は、赤み來りぬ。かれはこの高きやの王なり。蔦の葉しげき舊墟の壁には、生ある手足の如き莖ひろがり、きらびやかなる綠葉は赤き磚（れんがはら）をつゝみて、螺鈿の貝の如く、くちなはめいたる玄のぶ草も、軒端の鳥の巣を襲ひつれど、そこには、はやくも、戀わたる燕のかたらひ去げし。

村人は皆ピアシェを恐なりといふ。されどこの高塔に於て、かれは君王なり、詩人なり。蒼穹この花多き地を蓋ひて低きとき、アドリアの海

の、日の下に輝くとき、衢はなりはひにいそしむ時、かれは隼鷹の如く鐘樓の欄に倚り、或夜過て額を破りたるラ、ルウヴの鐘に耳よせつゝ、をりをり肱あてゝ、搖曳する美音を樂みぬ。傍のラ、シァントゥウスは唐草の金具におきたる珠玉の如く、聖アントニオの浮彫もまばゆきばかり、又少しはなれて、腰に傷ある舊鐘ラ、ストリイジは、ものうげに口ひらきたり。

噫鯨鐘三個。幻は生まれぬ、夢のすさびはおひぬ、縹緲たるなさけの歌物語は起りぬ。ゾルフィナの姿よ、いかに樂いかな。曙のにほふとき、美音の海にうかびて、あるは黃昏のそら、ラ、ルウヴのおとうらがなしく、うれしき衰へに鐘樂のきえゆく時。

卯月それの日、二人はラ、モノオンデルのうしろの原、胡桃の大樹の陰に會しぬ。そらは、こゝかしこ、入日の紫の影に染みて、猫眼石の色を帶びたり。むすめは牛の飼ぐさを苅りつゝ、歌ひぬ。十月新酒の香の如

く、春のにほひ頭にのぼりて、めくらまむとす。頸をのべて、うつむけば、若草肌にふれて、撫でいだくが如く、快よさに、眼は半とぢたり。

撫子の花束を後に、帽うちふりてピアシェは來りぬ。みにくからぬ姿の物狂ほしき光ある黑眼は、檻の內なる獸類の眼ざしの如く懋を滯びて、聲は人間のそれとしもあらず、抑揚なく、變化なく、陰影なきあやしき音なり。鐘樓高く、空ちかく、白日のもと、幽寂のうち、彼は金聲の息深き喉音にこの言葉を學びたるなり。

「ゾルフィナ、何をし給ふ。」「神父ミシュル樣の牛にとて草苅るなり。さなり。」と答へ、うつむけるむすめ心は、波うち騷ぎぬ。「嗚、ゾルフィナ、このよき香をかぎ給ふや。われは樓の頂にありて、希臘おろしに帆かくる船を眺めつゝありしに、きみは歌ひつゝ、塔下をゆけり、草花の歌を……」

感極て語なし。胡桃の戰ぎ、遙海のさゝやきを耳にして、言葉なく、ピ

アシェは草を薙て、むすめの傍にふし、いひしらぬ樂にさそはれて、おのづから、手を求めむとすれば、ゾルフィナは炭火のやうに、もみぢす。

「手つざはせ給はずや」とうちかへす時、艶なる蜥蜴ふたつ矢の如く、野を横りて、遂生にかくれぬ。

ピアシェは手を執ふ。「放し給へ」と微かに口籠りす。なほ、ひきよすれば、くちづけをかへしぬ。「いな、いな」と答へつゝ、覆盆子の如き唇をさゝげぬ。

戀は草とともに生ひ、草は波の如く生ひぬ。綠の湖の原のもなか、朱きかみおほひの額つき、をかしく、嫋びやかなるゾルフィナは罌粟の花のあはれあり。林檎のつらぬ、桑のもと、このみは重く、かつらはふ垣根にそひて、菜の花の黃金の波に、いかばかり樂み多き歌はありけん。かくてまた聖アントニオの野寺には、ラ、シャントァウスの樂さらに歡びを加へ、

烏鵲のこひわたるかと疑はる。

ある朝、ピアシェは新にあつめたる花束を手にして待ちたれど、ゾルフィナのかげはみえざりき。むすめは痘瘡をやみぬ。あはれなるピアシェよ。之を聞て血は氷りぬ。ラ、ルウヴに頼わりし夜よりもなほよろめきぬ。

心におもき歎はあれど、彼は鐘樓に登りて、つかれたる腕を動かし、枝の祭の祝の鐘をつかざる可からず。あざける如き日の光、橄欖の折枝、祭の飾、香烟の雲、讃歌の調祈禱の聲いづれか彼を誹らざりける。嗚永貞童女、生神母。苦悶なり、呵責なり。

かくて苦みの日は過ぎぬ。夕ざればピアシェはをとめの家をめぐりて、野犬のおくつきどころにさまよふ如く、閉ぢたる戸にたゆたふ毎に、燈のかげすきて見ゆ。涙にくれてうちなる人のゆきゝを守り、ぐらす

窓に耳をふれ、波うつ胸を押へつゝ、狂人の如く歩みつゞけしが、終に走て例の屋根うらにかくれぬ。この夕、蒼顔死よりも白く、巨鐘の傍に坐して、髪をにぎれば、鐘樓のもとちまたのあたり、月と靜寂とあるのみにて、前はなぎたる羊毛の波、人げなき磯を洗ひ、凡べての上に冷刻の虚堂かゝりぬ。

めのしたはるか軒端のみ僅に見ゆれど、そこにゾルフィナは病にふしたり。芳顔既に黒點にけがれ、紅唇語なく、殘燈しのゝめに白むとき、祈禱のつぶやきはやがて涕泣の高聲となりぬ。二たび三たび語らむとして、金髪の頭もたげたれど、言葉はやく喉に消えて覺えなく、のけざまに仆れぬ。むすめの唇は動きぬ。羊の屠らるゝ如き音す。かくてゾルフィナは息絶ゑたり。

* * * * *

なき人を見むとて、ピアシェはゆきたれど、茫然としてたゞ花みちたる柩を目守りぬ。其底に横ふわかきからだには爛壊既に來りて雪なす布の上、さらに醜し。衆に交りてたゞ一眼、瞳をかへして樓に向ひ、例の木梯子半のぼりてラ、シャントゥスの綱を握み、うなぢに卷きて宙にかゝりぬ。

鐘は聖金曜の靜寂を破りて、歡ばしき銀聲五六を點ずれば、むら燕軒をたちて天心にむかひぬ。

（ダンヌンチオ）

艶女物語

眞砂地のあげはりの陰、水浴はて、衣つけあへぬに、男は、落の日をあぶる白の水衣の女を眺む。眼にはなかば、悲しげなる光浮みて、眞晝の白光に心地惱しう、おぼろなる恐れのそひ來るぞあやしき。今ぞパン

神の駭かすてふすさまじき刻、この世の虛をおほふ寂莫光明のをりなれば、昔の異教びとが傳へけむやうに、冷刻幽玄の神しろしめす磯波に、天狼の星燦くが如き三伏の畏みを覺えて、物としもなき恐れみの底には、宛も影うすく、障り大なる化生のものをまてる人の煩ひに似たる思潜み、われながら心弱く、おぢまさりて氣萎え、力失せたるは、一業に敗れしあとの歎きの如し。波間に沈み、日にむかひ、水に打入れ、泳ぎありきて、果敢なき虛空の氣と息を爭ふに、正しく勢の極り、青春の衰へ、魔障のほろぼしを覺えけり。生氣のめぐり鐵鎖まき迫りて、惰力の勢增しゆくなべに、新圈のせばみ來るを知り、飜てこの白日莊麗のうちにたてる艶女を見れば、筋肉の衰頽とみに加りぬ。

髪はほさむとて、さばきたれば、水にふくれし亂髪、肩すぎて、紫にほふまで、黑みたり。すぐなる華車の肉置は、希臘摺衣の襞に包まれて、半ば

波のぐらす野に、半は空の清明に際立ち、うつむき物思ふ横顔は、長髪のうちにかくれぬ。ある時は素足を白砂に沒して、熱氣堪うまじきまで保ち、さてその燃ゆる如きを潮に投じて、磯うちかい撫る波に冷したり。暫しは、この二重のげらくに耽りて、われを忘るゝ思ありしを、忽にして女は身を顫して、紫海の間、すこやかにも氣まゝなる潮と光とに任しぬ。嗟、いかなれば、かくも痛しげに、また健やかに、かゝる總ての矛盾を其身に調へ、おなじ日、おなじ時に異れる姿をとりうるぞ。忽にして緘默の魔女、星の世の病てふ業惡をはぐゝみ、忽にして輾轉反側の狂女、驕樂却て苦悶の愁容を帶ぶるかとみれば、今まのあたり渚の艶女となりて、もの、みなの快樂を蒐め味ふの誇りげなるげに、波は音妙なるヘレスポントスの晶光に、搖曳の影ゆらぐ古代美神の像を仰ぎたる心地こそすれ。」

すぐれて、すこやかなるはこの女人なり。忽もて眺めたる男の心は、

やう〳〵感迫り、情激し、顧みて其身の倦怠を思へば、憤怒深みゆきて、憎しみまさりぬ。

眞砂に熱し、水にひたせるその足よ、おもへばあえかならじ。指はゆがめる下司のかた、何の風情もなく、氏ひくき生れの爭はれぬを見つゝあれば、世の常ならぬ明觀に、全身の姿さへ心に浮び來て、思ふやう

「そこの汚血にいくその不淨や滿へたる。親々が遺傳の性すべて泯ぶるなく、いつか沸きいでむをまちて、いかなる堰をも濺らむずらむ。われは終にこれをえ淨めじ。ただ去ばばらく、この形骸の上に、麤りやすきわが夢の相をうつすのみ。わが孤の悅に欠く可からざる器をかるのみ。」

かくて男の理性はこの女人を想像の一因緣とし、眼にみゆる姿の價を奪ひたれど、觀相は鋭くも、ふたりがえにしのいと强き結びを、この實

なる肉の性にありとし、而もこの女のえんなるよりも、その美しからぬあたりに基けりとせり。醜きを曉りて緣いよゝ固く、妖かつて減せず、むげに賤しと知れるその媚も否み難きひきつけぞかし。彼はこのたびくの思を知れり。しばくするどき明觀を以て、この女の微かなる瑕を誇大にし、之を眺め之を驗みさずむばやまず。遂に五官に、精神に、いひしらぬ亂れを覺ゆるに至る時、急かに樂慾の逆卷きよするぞ常なりける。これは人間の人間に傳ふる肉の大魔力のしるしにて、かの狂亂の戀人が、思ひもの、白き傾足なる年頃の痣をめで、日毎にくせづく髪の縺れ、涙のしほにくちづけの味まさる朱唇にあぐかるゝも皆この魔障に勝たれたればぞ。

つらくゝ、思ひめぐらしぬ、年波のうつろひを、ならひ性となりし因緣の絲を、倦じたる戀の限なき愁を。かくてゆくさきを思ふに、みづから

は、鐵鎖につける奴隷のやうに、この肉につながれて、こゝろばせも結ばれ、思もなく、しれたるうつけ者とやならむ。またはおもひもの、花あせて、年老い迫るまゝに、歲月の靜なるこぼちにも抗せず、かの力なき手にて古りたる惑溺の被衣をむしりとる時も、なほ惡緣の絆はたゝざらむか。男は、まのあたり、死といふまれびとをまつ、音なく人げなき破れ廂を眺めたるなり。

はるけき昔のひるすぎに、父の家にゐてきゝしわらはごの聲を思ひいでつ。

「かれはうまずめなり。その內臟は咀はれたり。極熱のかまどに於ける如く、凡べての物、そこに滅びつ。かれはわが生のいと深き本性を沒せむとするか。」

この戀のやうなきは天地大法のゆるしがたき犯しに似たり。——さ

れどこの情は休みなき驕樂に過ぎざるを、いかなれば、除けがたき凶運のやうなるぞ、後あらむとする本性は、性慾の唯一なる眞因にあらずや。盲ひなる、とこしへなるこの本性は樂慾の源にして、此欲のあては、陰れたるも、陽はなるも、自然が定めし產殖にあらずや。さらば今、われと、この胎なき者とを結ぶえにしの絲や、いづちより來れる。種の恐ろしき「意志」はしうねくも、この病にあらされてはらごもらぬからだにも生命の貫を迫り求むるか。この戀に缺けたるは、卽ち戀の第一儀なり。にんにんの命のかぎりを越えたる人生の確めなり、擴りなり。このおもひ者にかけたるは「子うむものゝなやみ」といふ幽玄なる女性の務なり。かたみの憂愁を來すも、またこの怪事にあるか、あらずか。

女は、にはかにふりむきていふ。「水に入り給はずや。見よ、橄欖のやうに黑みても、なほ愛し給ふか。」

あげはりの方に進みより、諸手に、襦袢の裾かゝけて、身振に猥らなる媚をうかべ、こちねんとして戀望のけはひ醉ひたる如し。

「愛し給ふか。」

幕に入らむとて、すこしかゞめる時、雪なす絹衣（すゞし）のゆたけきに、婀娜とたをやかの身は、猫の如き媚にふるへて、男の亂れ心地には、あやしき痛みある温みと香ひとを與ふ。よりそひて、むしろに横ふや、潮の香たかき滑髮の雨、芳顏に散りて、白眼の光おそろしく、葉隱の木の果か、紅唇あざやかなり。

妾に、笑にある如く、音聲にもかげあり。あやしき妖艶のかげあり。戀人の胸に蟠まれるこゝろ知りてや、之を破らずむば、やまじとみゆ。

「何をか見給ふ」といひ放ちぬ。「否、否、見給ふな、醜きものを。」

女は足をひいて水衣の襞にかくしぬ。

「否、否、見せじ。」

怨むが如く、耻づるが如く、今も男のまざしのうちに、にがき眞の光をみて、蛾眉おのづから顰む。

「意地わろき人よ」と戯むるゝが如く憎むが如し。

たぢろぎて男は答ふ。

「われの君をすべて美しからぬなしとするは常に知り給ふなる可し。かくてくちづけをさゝげて近よらむとす。

「いな、まち給へ、み給ふなかれ。」

幕のひとすみにすべり入りて、女は遠ざかりぬ。手ばやく黒絹の長襦袢穿ちて、例の定めなきゑみを帶びて、耻ぢげなく戻り來りつ。足を男の前に投げて、足袋紐しづかに膝頭に結びぬ。狡らなる笑のうち、巧なる嘲のふしみえて、このおそろしき沈默の辨口にこそ、明らけき心は讀

まれたれ。曰く、われは常に敗れじ。汝はわれと限りなき樂欲をたのしび、われは、はてなき汝の欲を激するいつはりを帶ぶ可し。汝の遠觀も何かあらむ。破れたる幕は直につくろひ、さきたる紐はすぐ結ばむ。われは汝の心よりも強し。汝の心のうちに、われを變ずる秘訣、汝の眼にわれを改むべきけはひと言葉とをよく知れり。わがはだの香ひは、汝に、世を溶すべき能あるを知らずや。」

まことに世は溶けぬ、くちなはの如くすべりて蘆の席に女の横ふ時よ。けふもまた現し世は亂れたる假の姿に變じて、幻の相を現じぬ。おほうみのとゞろきは、まだらの黄金をもて、とばりを滿し、其たてぬきに金砂子を交ゆ。はじめには、浩蕩のはてなきぞあらはれ、つゞいて、白光のもと、煙波悲むと見るまに、その幻もきえてけり。

寂寞のうち、血管の拍節あるのみ、幻影のうち双眼の狂熱あるのみ。

女は雲の如く、よもより男をおほひぬ。もえたる肌のきめよりは、潮の香たちて、炎上の礁砂に比すべく、こき滯髪に深海の昆布の森を、内心の亂れに海底の怪を忍ぶ可し。

衣のさはる音のうち、遠くよりの如く女の聲す。

「まだ少し息み給ふか、眠り給ふか。」

かれは眼開きて夢心地につぶやきつ。

「いな、ねむりたるにあらず。」

「何し給ふ。」

「死ぬるなり。」

笑はむとして艶女の皓齒を眺む。

「衣きせまゐらせむか。」

「いな、一人してすぐ着かへむ。行け、行け、すぐにあとよりせむ」といふ

もねむたげ。

「さらばいぬべし、われ饑ゑたり。とく來給へ。」

「然り、とく、ゆかむ。」

忽ち女の唇を覺えてがくぬんたりしが、うち笑みて、「ありがたし」といふ。遠ざかりゆく足の下に、沙のかむ音のみして、たとしへなき靜寂は、再び磯をおほひぬ。時をおきて、渚のかた、岩が根のもと、波聲いとしめやかに、水澤に、水かふしゝじもの音に似たり。

喪心の極昏々たるを、やがて起上り、心頭の霧を拂はむとするに、なほ亂れ心地なるを覺えぬ。あたり眺むれば、萬有、すべて空なる如く、心はうつろ、思整ふるに遑なく、かりそめの身動にも、莫大の力いり、そともの白光、眼をついて眩まむとす。あはれ、このねむりのとこしへにさめずあらなむ。死なむかな、さらば再びかれを見ざらむ。幾分の、ち、かれ

に會ひて、また其くちづけをうけ、其言葉を耳にすることの確なるを思ふこそおそろしけれ。

衣つけむとしてたゆたひぬ。いろ〳〵のおろかしき思、頭に亂れたれど、知らず〳〵きかへ終りて、とばり出づる時、迷眩襲ひ來て眼おのづから閉ぢ、紅の球、眼蓋に轉ずるを覺ゆ。

再び開ける時、外界の眺は、いひしらぬおもひをあたふ。かぎりなき歳すぎて、異れる生にゐて、これらをしも望むに似たり。

日かげ鞭うつ磯の渚は、石灰の白みを帶び、浩蕩、光悲む大海の鏡の上には、蒼空いよ〳〵迫り來りて、不測の大難、今起らむとするを待つが如く、石原の岬は、人げなき入江を抱きて、影くろき隱れ岩の上に聳え、木立ならびたてる頂に、狂ふが如く怒るが如き橄欖數株、さびしげに天心を指しぬ。漁村は、岩上に餌ねらふ怪物のさまして、帆檣、帆綱のかげをす

きて、銅像めいたる漁人、水にかゝれる見ゆ。ひとへに、これ悲愁多きかれらが一生に、非命の魔障かゝれる姿か。

忽にして聲あり、寂莫の境を破り、擾亂の心に破れ、山莊のかたより傳はりぬ。

身ぶるひして歩を轉じぬ。聲はすみわたりてつよく「はやくはやく」と女は促がす。

山路にかゝる時、隧道の口に、煙たちて、其とゞろきは、なゝ里に及びぬ。再び輕き迷眩を覺えて、道のべにとゞまれば、狂念、光の如く、魂心を襲ふ。れいるの上に枕せばや……一秒の後、萬事休せむを。

音は襲するばかり、勢猛に、思直せるわかうどの顔に、風うちつけて、事なく氣車は向ひの隧道に入り、黒烟ほとはしりでゝ、天日をおほひぬ。

（ダンヌンチオ）

樂聲

友の擇びて、アンコオナに借り、サン、ポイトオに送りて、やうゝこの隱家までおこせたるピヤノを、稚くも興がりて、イポリタは迎ふ。ジョルジョが書院と名けたる、ほかよりも廣く、裝飾もありて、褥つきの寢椅子、白楊の長椅子、吊床、筵、几帳、具はり、樂寢の日暮し、夢見心地に適はしき一室に据ゑたり。樂譜壹函また羅馬よりとゞきぬ。

かくて、數日の間、新らしき醉心地ぞありし。かたみに物狂ほしき興奮に戯れ、日比の習はしも忘じ果てつ、萬づを棄てゝ、全くこの快樂に沈みぬ。

長々し日の胸ふたがる徒然に苦まず、堪へ難うおもき昏睡のうつらゝを知らで、眠を曙に延ばし、食を時のほかにして、何の苦みなく覺え

もなきは、宛も身の昇華して、日々の定めごと棄てたる如し。萬有の涯をこえて、怪しくも情熱の加ふるを覺え、心臟の鼓動、世に珍らしき力を添ふ。をりふしは恢復せし如し、こよなき忘我のかの刹那を、かの夕暮のふたつなき刹那を。をりふしは、二人の生、雲霧のそこはかとなく、虛空に消えひろごれる、たとしへなき思、今またこゝに再びする如く、おもへらく、けふこの立てる呼吸の地、げに里遠み〳〵、いとも〳〵幽けく寂しき人げなき國、この世のほかのこゝちあるを。

奇しき力ありて、二人を近づけ、二人を結び、かたみを混じ、かたみを溶かして、心身ひとつなみなる一體となし終むぬ。奇しき力ありて、二人を離し、二人を裂き、互の獨りねに遠ざけて、其間、底しらぬ深淵を横ふ。その生の底つ根には、甲斐なき非命の樂欲燃えたり。

ふたつ擇のこの間に立ちて、二人は苦を閲し、樂を享く。相見てしそ

のかみの情の極みに上るかとすれば、落居むとして甲斐なき心づくしの底に下りぬ。はたまた大夢の源に遡りて、身も世も忘れしはじめの日、同じ無言の語葉を交はし、幽影を呼吸して、なほ下り、なほ下りては、とりあつめたる切望の空頼に向ひ、炎火熱灰の渦卷にや響へつべき影黒く息ぐるしき大氣に投じぬ。

ともに心ゆく音樂幻法の名人等は、勢猛なる多恨のめぐりに、それぞれの幻、織り出でつ。ロベルト、シュウマンの「パジナ」はなれて久しき戀のなさけを呼びかへして、其上に人工の空の如き、いと美しき追憶の緯をひろげ、愕き悲むやさしみをもて、消えてゆく殘り惜しさを滿ふ。フレデリック、ショパンの「即興樂」は、夢のやうに語りぬ。「われはきく、よもすがら、わが胸の上に君ねむるとき。われはきく、夜の靜けさに、滴の落つるを、また落つるを、常にかつ進み、かつ遠み、絶間なく落つるを。われはきく、

夜もすがら、君ねむる時、君ねむるとき、われひとり」と。葡萄染の帳は高く、つれもなき情熱を忍ばせ、おくつきなす深床のめぐり、これぞエドワルド、グリイグの「戀慕」なる。音もなき耽樂のうち、寂滅のけはひこそすれ。あるは地上のよしといふよきものに滿ちたる國、はてもなき大國が、崩れ給ひぬる君を、洞房殯宮の二を兼ねて、葡萄染に崩れ給ひぬる君を、頼みなげに待ち暮すにも似たり。されどこれらのもの終に「トリスタン、イソルデ」の序樂に如かめや。死出に向ふ戀の叫こゝにして、たとしへなき雄詰もて罵り、飽くこと知らぬ樂欲は破滅の醉狂にのぼりぬ。……「君を祝して、かのとこなさけの盃をほさむと、われと共に、同じ祭壇の上、君を死に捧げむ。」

極みなき諧音の歴は二人を抗し難くつゝみて、かの「靈郷」に奪ひ去りつ。

噫このたぎつ心の豊盛を、せめて影ばかり、辱きかへさむも、はしたなき樂器のよくする所ならず、悲愁かぎりなきこの示現の雄大を咲ひ知りしは、自らが註釋の精妙なり、狂熱なり。　ひと日、思ひ人の口づから、荒れたるグエルフォの都、精舍僧院の市を示せる如く、けふしも思ひ回らしぬ、かのバイロイト蒼古のまちを。　バイエルン山々のむかひ、孤り寂げに、アルブレヒト、デュウレルが畫稿、畫布の奥、線廊の網に閉ぢられたる幽玄の郷に思は馳せぬ。

はじめて、理想劇に志したる遊行の旅のあはれは、ジョルジョの今に忘れざるところ、艶なる丘の上、影ひろき木下路をすぎて、藝術の聖なる祭に捧げられたる殿堂のはじめて眼に入りし時、いひしらぬ感慨の湧きいでたる始終は、けふもなほ晴じう可し。　圓柱拱廊をめぐらせる圓形大劇場の壯嚴、かの「幽潭」の玄妙は心に浮びぬ。　とりあつめたる虚空の

無聲幽影裡、凡心の寂寞入定裡、めにみえぬ管絃樂部より吐息は起りぬ、うめきぞたてる。　悲の極なる孤思の訴は、口籠る忍音にこそはあらはれけれ。　後の悶の先驅なる亂れ心地の痛哭なるか、その息、その呻、その叫は、おぼろげの惱に始りて、やう〳〵絶叫の清鋭にうつり、夢幻の驕樂、世に珍らしき大願の痛心、烈しくなだめ難き我意を語りぬ。　ものみな燬盡さむず狂熱もて、樂欲の擴ごり散るは、深淵を迸り出づる猛火の如く、二人の命の精に養はれて、愈高く愈高く、燃えたつこと愈高し。　音も妙なる焰は、醉ひさまだれて、萬有を抱き、現し世にあるよしといふよきもの、凡ては、この狂醉に鳴りとよみて、胸の奥の〳〵の哀樂を吐きいで、雲と散り、灰ともえたり。　この時忽然として、さはいへど、反抗の力、爭鬪の憤ありて、暴びたる昇天の飛翔にふるへぬ。　かくて生命の大泉一枝、とみに、形なき障礙に破れて、下りつ、きえつ、はた迸るなし、とりあつ

めたる虚空の無聲幽影裡、凡心の寂寞入定裡、幽潭のそこより欷嘘は起り、嗚咽に消えつ、よわ聲微かにとこしへの寂しさに泣き、とこしへの闇に憧れ、聖なる大極の忘我を望みぬ。

をりしもあれ一聲、まことの人間の聲ぞ、人間の唇に調へられて、若く、強く、悲の、嘲の、威の聲ぞ。白面金髪の玉妻、イルランドの姫を、マルケの王に齎らす花船の檣高く、海の歌きこゆ。歌にいふ、西のかた眼はうつる。ひんがしに、花船ぞむく。風は涼し、故里のかた。嗚イルランドむすめ、いづこにたゆたふ。わが帆ふくだむるもの、そのといきなりや。吹け〳〵風よ、哀し、嗚かなし、イルランドむすめ、狂亂の姫や。哨の近侍の戒、豫言のむしじらせ、激越脅迫の趣を含み、愛撫嘲笑の姿ありて、ものとしもなき占かたぞ。この時管絃の聲は默しぬ。「吹け〳〵風よ、かなし嗚、かなしイルランドむすめ、狂亂の姫や」と、この聲、音無の海

に浮び、無聲の海影に高く、あげはりのもと、イソルデは床の上にそひ伏して、おぼろなる定業の夢に投じぬ。

かくの如くにして歌劇は起りぬ。既に序樂を援がし、悲風は、管絃の樂聲にきえゆきつ。猛威破滅の勢は、忽然として幻法の美女にあらはれ、其選びて死に捧げたる男をあやめむとす。怒は盲なる元行の力もて罵り、天地の烈しき力を祈りよせて、男の命とらむと計りぬ。「わが祈にきゝて醒よかし、大猛威力、なが隠れたる胸よりのぼれ。あゝ定めなの風や、この思きゝてよ。この夢心地なる海の昏睡を救ひ、解き難き切望を深みより甦へらしめ、之にわが捧ぐる餌を示せ。船をくだけ、流れ藻をのめや。脈うつもの、息あるもの、凡べてを、われは、あはれ、風よ、興へなむ。」此時、候哨の諫に答ふるもの、ブランゲエヲのむしじらせなり。「あゝ悲し、ものとはなき恐れ何ぞかくは切なる。イソルデ姫。」まめに

やさしき女心は狂ほしの亂れ心地和げむとす。「あはれ、きかせ給へ、君の悲を。イソルデの君よ、ひめごといざ明かむ」とあるに、イソルデ答ふ。

「むなぐるしや、あけよ、あけよ、この幕ひろく。」

かなた、トリスタン腕拱ぬき、大洋のはてを眺めて立てり。檣頭の候哨をりかへしつゝ、歌ふをきけば、管絃の樂の波の穂にたゞよひて、悲し、あゝ悲し」とどよむ。このあひだイソルデの眼はすさまじき光を添へて、前なる勇士眺むるをりしも、薄命の樂旨は「幽潭」のうちより上りぬ。

戀と死との恐しき大象微、うちに、悲しき物語の髓を滿ふ。紅唇やをら命を下しぬ。「われに選ばれ、われに失はれむ。」

情熱は、女に殺伐の意を宿し、其生の根に、衆生に抗する本能を醒して、解散寂滅の大欲をさそひいでぬ。名殘なく萬づをうち滅さむ恐しの大勢力を、われと、わがめぐりにあさり悶ゆるほどに、脅迫、頭上に墜ちか

かり、反抗のすべてむやくなるを知りつゝも、靜平不動のさま失はぬこの勇士をみて情、いよ〳〵烈し。「この奴何とかみるとおだやかならず、あざみ笑ひて、ブランゲエヲに語れるは、既にかれをしも奴として、吾自らを主となしゝか。「ゆきて告げよかし、主の恐るべきを敎ふるものわれイソルデなりと。」大爭鬪のはじめとして、發せるもの實に威なり。猛力猛力とすまはむず、はじめの挑これなり。暗憺たる壯嚴の趣は、帳前に進む勇士の歩みに伴ふ。今しも呼び返し難き刻は來りぬ。魂迷ふ媚藥既に盃にみち、定藥はやく二人の生をめぐりぬ。床によりてイソルデ、滿身の血を高熱にやき盡したる如く蒼ざめ、たゞ眺めいりて語藥なし。語藥なくトリスタンも、幕の口に進めば、互のゐだけ、いや高く、管絃の樂ふたりのいひがたき煩を奏でぬ。

此時よりして、怒號の昇天再び起りぬ。宛も、幽潭は、鑄爐の新に燃え

たつ如く、妙音の烟、ふきいで、高く、常に〳〵高し。「とこしへの愁には、二つなき慰、清々しき忘我の水や、われは、恐なく、なれを干さむ」とトリスタン乃ち盃を口にす。「われにも分てよ、君がために飲まむ」と盃奪ひつつイソルデいふ。薬酒すべて干し終ぬ、檀金玉盃戛として地に委す。

あはれ二人とも死をや飲みけむ、ともに死せざる可からざるか。人間の曾て覺えざりし悶の刹那よ。死出の薬水は戀さそふ毒酒なりけり。無盡の炎は浸みわたりぬ。愕然として身動なく、眺めあひつゝ、互の瞳に、死の近ける印を求むれど、今まで覺えなき熱烈の新生は、渾身の纖維を激し、額に、肘に、ひよめきて、二人の心は巨浪大瀾にひろごれり。「トリスタンよ、イソルデよ」と互によばふ。世はたゞ二人。めぐりは空し。

きし方はほろびぬ。當來の暗夜は、まのあたりなる狂醉の光もてするも照し難しや。二人はたゞ生きたり、聲あげてよばふ。如何なる大力

も、控へ難き悲運にのせられて、近づく、「トリスタンよ、イソルデよ」

情熱の妙音は動きまさる諧音の波の上にたゞよひ、高まり、ひよめき、うめき、さけび、歌ひぬ。悲たとしへなく、悅たぐひなく、測り知らぬ法悅の深淵、こよなき歡樂の深淵に向ひて、禁めがたく、あまかけり走りぬ。

「世にはさかりて、われ終に君をえたり、君のみぞわが心なる。戀のなさけのこよなき歡樂。」

「萬歲、萬歲、マルケ王」と喇叭喇吶の聲のうち、供奉の群さゞめく。「コルンワル萬歲」と王は渚に下りて、白面金髮の新妻を迎ふ。

双生合一の驅援なり。浮世歡樂の鼓噪なり。白日の眩ゆき赫奕なり。選ばれし者、滅されし者、夢路の黑影、うかびぬる睫を決して、問ひけらく、「近づく者は誰ぞ。」「國王陛下。」「何れの王ぞ。」王家の長袍につゝまれて、蒼顏しどけなく、イソルデは問ふ。「われいづこにかある。生きた

るか。なほ生きざるべからざるか」と。媚藥の樂旨は、うつくしくもおそろしくなりとよみて、熱冲の渦卷に二人をおほひつゝみぬ。「萬歳マルケ王、萬歳。コルンワル。わがきみ萬歳。」

しかすがに第二の序樂には、極りつくせる歡樂の吐息、怒り懷る樂欲の喘、狂ひ憧がるゝ熱望のおびえ、すべてゆきかひ雜り亂れぬ。待ちわびて、堰きあへぬ女心は、夜の廣大に、あるは盛夏あたら夜の空に醒めたる呼吸ある萬象に、其戰慄を傳ふ。醉ひさまだれたる心は、萬象に望みていはく、星のもとに夜を明かせ、戀のほがひに列り、その歡のむしろに、列れと。このとき諧調の、さやゝ海に沈みあへぬ薄倖の調は、てりみ、くもりみ、たゞよへるに、「幽潭」の波、宛も人間ならぬものゝ胸の呼吸に等しく、或は漲り、或は高まり、落つるはまた高まらむため、また落ちむが爲、しづけくも和ぎむが爲ぞ。

「聞かずや、風はをちに靜れるを」と、イソルデは、げに、愛着の夢のほかに聞くことなし。をりしもあれ夜狩の歌笛は、森陰にとよみ、定かにも近きぬ。「風のすさびの落葉の音よ、人まどはしのさゝやきかな……かうやうの音は角笛のこゑにあらじ。靜心ある夜のとく〳〵水か、滴るゝ泉のつぶやきか……」愛着の浮ぶるあやしの幽聲のみぞきこえて、古るく、又いつも新らしき迷は起りぬ。この亂れ心地と同じく、管絃の樂にも、遊獵の樂にも、いつか奇しき變化起りて、深林の限りなき戰夏の夜の幽なる風籟を傳ふ。くゞもれる萬づの聲、かすけき誘惑の凡べては、喘ぎたる女をつゝみて、次なる狂亂を敎ふるに、この間ブランゲエヲ、心あわたゞしく、大難あらざれと願べども益なし。「噫、導べの松明あかく照らせよ。その光もて危きを照らせ」と。戀慕の闇をてらすべき力なきを如何にせむ。「それわが生のあかしとや、なんの恐れもなく、われは

消してむ、恐れなくわれは消さむ」と、こよなき卑みのさしまねぎして、イソルデは松明かいやりつ。悲運の夜に捧ぐるはおのが命、選びし人の命、かくてなほも深く〳〵男と共に闇路に入りぬ。

是に於てか、愛着の醉ひさまだるゝ歌物語は、勝ほこりつゝ、螺旋の如く、擴ごりて、狂動法悅の頂に達せり。されば狂へる戀慕の新枕には、歡樂まじり、苦悶添ひ、互に交はらむとして、飽くなき心は、肉胎の遥き入り難き隙礙に妨げらる。戀まだしらぬそのかみ、あだにすごし、來し方の恨めしく、惡くきは日のめぞ、憂愁を鋭くし、忘執をよみがへらし、誇に利あり、情に不利なる邪まの日のめや。親しき暗夜、情しる烏羽玉は、ほむべきかな。內心の幻影、奇しくもひろごり、遠音にしてこの世は聞え、理想の花冠、たゆまぬ枝に花さける神聖密敎の姿かな。「われらの胸、日を厭せり。されば幸運の星も笑みて照さむ」

この時管絃の樂は、妙音のかぎりをつくして、人間の曾て覺えざる萬づの樂を歌ひ、よろづの愁を泣く。うましねは、諧樂の深みより浮みて、ひろごり、さかり、まじり、みえがくれてまた現はる。不安愈まさりゆく斷腸の痛心は、あらゆる樂器の上をすぎて、とゞき難きに及ばむとして常にえとげぬ無益の奮心を示し、半音級調の熱烈は、如何に近づくとも、捉へ難き靜安の追求を現はし、聲音、律呂音節の變化、約調の連續には、をやみなき索涯なき貪、とこしへに誑かれ、はたとこしへにつきせぬ樂欲の恨長き苦悶みえたり。一連の樂旨あり、樂欲の常に捉へむとして、とこしへに誑かるゝを示せり。しうねく、むごく、ひま〳〵に戻り來て、あるは諧調の波の穗をてらし、あるは影くろくおほひ、ひろごりて、よろづをしろしめ。

魂迷ふ蠱藥の大魔力は、死出に捧げられたる戀人ふたりの心身をぬ

ぐりて、この非命なる熱烈を消し、和ぐるものたえてあらじ、死のほかにあらじ。あらゆる愛撫は試み盡して効なく、心の安を捉らへ、同一の生をえまくして、こよなき抱擁に全力を集むるもなほ甲斐なし。歎のその吐息は、悶のうめきとなり、排け難き障は二人の間に擴りて、これを裂き、之を遠ざけて、孤獨ならしむ。肉胎や、自我や、これぞやがて障礙なる。憎しみはおのづから心の底に浮び、消えむかな、失せなむず、殺さむ、死なむの願望おこれり。唇は唇に過ひて止まりぬ。トリスタンいふ「二人を遠ざけ放ちて、ながくトリスタンにインルデを愛ざしめざるもの、この君ひとりの爲に生きざらしむるもの、ほかなにか死にあひてほろぶべき」と。これ既に永遠の影に入りしものならずや。「かくて」とトリスタンつゞく「かくてわれら死なむかな。放ち難く、いつまでも結びて、終なく、さむるなく、恐れなく、名もなく、愛の懷に抱かれむ爲のほかに何

の生き甲斐あらじを」と。管絃樂の最弱音につれて、この言葉定かにもひゞきわたりぬ。新らしき法悅は二人の魂を奪ひ、夜の靈鄕の戸ぬちに伴ふ。既にまづ、融化の歡樂を味ひ、やう〳〵自我の重きを脫して、實躰おのづから昇華、飄揚するかぎりなき悅を知りぬ。げに、終なく、さむるなく、恐れなく、名もなし……

「心せよ、心せよ夜はくだちぬ」と、かくれたるブランゲエヂ高きより戒む、「心せよ」と。朝けの風圍生を吹きて百花めざむるとき、曙の冷光、靜に上りて、かゞやく星の光をおほひぬ。「心せよ」と。あゝ、忠なるみはりの諫も甲斐なし。二人は聞かざりき。醒むるを願はず、醒むる能はず。白日が威のもと、なほも〳〵わけ入りて、いなのめの光もとゞかぬその影の奥へ〳〵とこそゆけ。「とこしへに夜はおほはなむ」と。諧調の渦につゝまれ、烈しかる螺旋に抱かれ、樂欲の招げる狂瀾にさらはれ、戀の

狂に妨げなく悶もなき里へと萬づの愁をこえ、萬づの寂しさをこえ、こよなき大夢の無限寂寞裡にこそは入りにけれ。

「免れよ、トリスタン」とブランヴェヰの後、クルヱナル叫ぶ。狂しき歡の抱擁を破るもの、思もかけぬ手あらき戰なりけり。管絃の樂、なほも、戀愛の樂題をつゞくれど、遊獵の樂旨は金石の鏘々を以て、とよもしいでぬ。王は宮臣をゐてあらはれたり。長袍を擴げて、トリスタン乃ち花床のイソルデをかくす。かくて光より、人より、おもひ人を隱して、身ぶり、おのづから主權を示し、疑ひがたき大權能の存するを明しぬ。「悲しき日よ、けふを限り」と。げにけふこそは限りなりけれ。けはひ靜に心定めたるは、勇士の姿とみるべく、奇しき力もてこの爭を甘受するは、もとより何物かこの定業の流を堰きえむと確信すればなり。マルケ王の極愁、徐るく深き歌詠に發するあひだ、彼は默して、內心動くことな

かりしが、終に王の問に答ふらく「この秘密われ明かし難し、君は問ひ給ふも終にえしらじ」と。媚藥の樂旨はこの答のうちに玄秘の幽趣を疑らし、とりかへし難き行の深沈を集む。「噫、イソルデ、トリスタンに從ふや」と、衆人のまのあたり、こと短く女王に問ふ。「わが行く國には光てらず、ものかげの國、夜の國。胎をうけしも死の時にして、母のわれを生みしも死の時なるその國ぞ」と。イソルデ答ふらく「トリスタンの國ならば、そこにイソルデはゆかむ。やさしくまめやかにわが君の導く道に從はむかな」……

その後、叛賊メロットに偽うけ死に垂として、勇士かの國に先だちぬ。

かくて第三序樂の浮ぶるものは、里遠み人げなき浦回、草もなく燥きたる荒磯の幻にして、かくれたる入江の波は、感めなきとこしへの愛に泣きぬ。傳說の霧、幽幻の詩の雲は、かたくなの岩影をつゝみて、定かな

らぬ曙、消えかゝる黄昏の光たゞよふに、をりしも牧笛の聲、ほの〳〵として、過ぎし世のおぼろすがた、とし月の夜にほろびしものかげを浮ぶ。

「嘘、そのかみの清怨、今、はた、なにをか語る、こゝはいづこぞ」とトリスタンうめく。たわやかなる葦笛に牧童のとゝのふる音をきけば百世をこえて、おやよりおやへと吹き傳へたる幾代へつらむ不滅の調ぞ。邪なき心の清ければ、なんの亂れ心地だになし。

トリスタンの心は、何心なき調によりて、すべて知りぬ。「われはわがめざめし國に止まらざりき。されどいづこをさまよひしや。かしこにありて、日を見ず、國をみず、民をみざりき。しかすがに、わが見し者、なれに語りえせじ……常にゐしもそこ、常にゆかむもそこ、萬有開夜の無邊土なり。そこに孤の道あり。聖なる、とこしへなる、原始の忘我よ」と、熱がいはする譫語に思亂れ、姍樂の烈しき力、内心のたてぬきをくらふ。

嘘、この悶、人終に知らじ。われを食むこの恐しの樂欲、われを燬きつくす、抗しがたき炎……あゝいへばえに、あゝ人しらば。

無心の牧童さるめらを吹き〳〵てやまず。皆おなじ調ぞも、節はいつも變らで、過ぎし世のかげ、今はなき遠き古のことゞもを歌ひぬ。

トリスタンまたいふ、「歳を經し蒼古沈痛の調、その悲音、夕暮の風に浮びて、われに來りしは、はるけきむかし、父の死の子に告げられし時なり。また悲しき曙に心地亂れ〳〵し時、われを尋ねて母の身の上、語りしもなれなり。吾をなして父の逝きし時、われを生みて母のうせし時、この今の古調うれたくも、哀れにも、ちゝはゝの耳やおそひけむ。ひと日この調の吾に問ひけるもの、げふまたわれに語る。何の爲にわれは生れし、何の業に。古調これに答ふらく、嘉ひかつ死ぬるが爲、嘉ひて死ぬるが爲と。あらず、あらず、これ眞のこゝろならじ。嘉ひ嘉ひ、死ぬまでも

嘉はむ。 されど嘉ひて死なじ」と……媚藥のしるし益々烈しく愈々しうねく、骨髓に達したれば、滿身つりかゞみ悶えふるひぬ。 時としては管絃の樂に、たく柴のはし〳〵あり。 時としては悲の暴び、その上を過ぎて、强風一陣、火焰をあほぎぬ。 いみじきおびえに、身は顫ひて、はげしき叫、胸ふたがる吐息自ら洩れつ。「媚藥、媚藥、胸より頭にのぼる其烈しさよ。 よのつねの穩なる死にては、この樂欲の呵責免れ難し。 何處にも、何處にも、悲しや、やすみは、求めえざらむとす。 夜は日のかたに吾を推し、日の眼またわが永遠の悶を味ひ照らす。 猛なる白日あゝわれを燬き、われを盡す。 而もこの身の高熱には、涼影の爽けさなし、たえてなし。 わが大呵責慰めむ何の痛みどめかあらむ」と。 其脈に、其髓に、一代が一代に積み、凡べての父、凡べての子の過、凡べての亂、凡べての悶にかさなれる萬人凡種の樂欲ぞ流れたる。 其血潮には、卑しき邪慾の芽ぐ

み花さきて、種々の不淨を雜へたるさへあるに、曆數定かならぬ古の世より、女の豐なる朱唇より、饑たる降從の男に注がれたるいみじきはげしき毒水はわきかへりぬ。 げにかれこそは永遠罪障のよつきなりけり。「われを愁に罪定めてしかの媚藥よ、これを闡へしは、自らぞ、吾自らぞ。 父の亂によりて、母の悶によりて、昔より泥がれたる戀の涙のすべてによりて、笑、悲、歡、痛のすべてによりて、自らこの媚藥をこそ作りしか。而してまた之を艶樂の一長鯨飲に干し終ぬ。……禍なる哉、かの媚藥。そを闡へしひと、また禍なる哉」と疲れ伏して奄々たり。 亂れたる心を修めて、其痛の痛はた强く、錯亂の眼を放て、浩蕩のあなたを眺む、かの秀れたる一念の佛を望むか。「かの君來りぬ。 もの、柔かに、心醉はす花の大浪にゆられて、この岸指したり。 聖き慰はゑまひより注ぎ、こよなき爽けさ、ふり來りぬ」と、……かくて彼は呼はりたけりぬ。 よのつぬ

の光に閉ぢたる眼もて見たり、かの巫女を、かの痛どめの女王を、よろづの傷のくすしを見たり。「かれ來る、かれ來る。見ずや、クルエナル、見ずや」と幽潭のさわげる波は、おどろ〳〵しく深淵の底より、今までにありしすべての調を集め、これを離へ、これを漂はして、九泉に沈め、また再び之を波上に浮べて玉瀾に碎きぬ。船の上に切なる爭の悶をあらはししもそれ。檀金玉盃の泡花、流火せめよする脈管の瞥々、艶薬催すあたら夜の吐息、卽ちこの調は、すべての象、すべてのおもひでを滿ふ。而してこの大破瀾の上、悲運の調たけ高く、狃し難く、勢猛に、ま、峻烈の責言を挿みぬ。「慕ひ〳〵死ぬまでも慕はむ、されど慕ひて死なじを」

「船ははてぬ。イソルデあゝイソルデの來る。今こそ渚に上りけれ」と高塔の上クルエナルよばふ。歡の夢現トリスタンに極れり。痍襁かいやりつ。渾身の熱血迸りいで、世を紅にす。イソルデ來り、死の

近づくに至て、彼は終に光を聞きぬる如し。「われ今光を聞かずや。あわが耳、光を聞かずや」と。內心の大光明は照らしぬ。肉胎百萬の分子は輝きぬ。赫奕の波、宇宙に漲る。光は音なり、音は光なり。

この時「幽潭」まことに天の如く光りぬ。大觀の達人が、不眠の冥想を凝らして夜の無聲のうちに聞きしといふ遠き星辰の諧調は、管絃の朗朗に現はれぬ。不安の遠長きふるへ、苦悶の絕間なきおびえ、甲斐なきあこがれの吐息、いつもあざむかるゝ樂欲の奮心、地上憂愁のすべての亂れ心地、やう〳〵和らぎ收りぬ。トリスタンは終に「靈鄕」の涯を破りしなり。永遠の夜に投せしなり。力なき屍に寄かゝりてイソルデは堪へ難き重みのやう〳〵うすれゆくを感じぬ。悲壯の調、このときいよ〳〵明に、愈々神々しく、この悲祭和讃を壓うす。既にして律は細糸のそこはかとなく、透明絕深のうすぎぬに戀人をつゝみ、壯麗の趣いは

むかたなく、和讃の翼に昇天の歌こそおこりけれ。「この笑顔いかにあえかぞ。人みずや、きかずや、星の世の清き光を。わが君の生の深みより迸りて、われを悅ばし、われを蓋ひ、われに染み入る、たとしへなき新聲の、あはれ、わがほかにしるひとなきか。」イルランドの巫女、妖艶の公主、地上幻想の判者、船頭に立ちて颶風狂瀾を招ぎし人、かの比ひなき勇士を選び莊ひて、之を醉はしめ滅し、人、世界のあるじに光榮勝利の道を失はしめし人、この毒手、この刺客、終に今、死の威力によりて、光明淨樂の生を享け、濁れるよろづの邪慾に離れ、卑しきくさ〳〵の煩惱を棄てゝ、六合遍照の界にうかびぬ。「耳にさゝやく清々しき音よ、そは大空の柔き波にあらずや。紫雲に、妙香に、われ投じて氣を吸ひ霧に溺れて、柔にけちなむか」と。女のすべては、分れ、さかり、ひろごりて諸行の生れ、萬象の消ゆる流轉元行の大海にかへりぬ。この變形、この化性につれて「幽

潭」のうち律は律にうつり、諸調また諸調につゞきて、宛も萬象こゝに解躰してその幽髓を氣發し、形なき象徴をあらはしゝが如し。この世のいとも〳〵あえかなる花瓣にもなき色、かげばかりなる微妙の芳香は浮びぬ。人しらぬ樂園の幻も、光のうちに現はれ、當來の世の芽もそこにほのみゆ。あわたゞしき狂亂はまさり〳〵ぬ。大極の合唱なり。衆音、一人聲をおほふ。化性のイソルデは勝に誇りて靈郷に投ず、「おばえなくて、けちなむ、沈まむ、うせなむ、凡心の極みなき搖動に。嘘、こよなき艶樂」

ガブリエレ、ダンヌンチオ（Gabriele D'Annunzio）は、千八百六十四年伊太利亞東岸アドリヤの海に枕める漁村ペスカラに生る。まだプラアトの愛に學びし比、歳十五にして、詩集一卷の著あり。"Intermezzo di Rime"（祖語挿曲）といふ。清新の調、紗闌の調を以て奔放の想を行りしもの、南歐藝苑の耳目を驚動せり。千八百八十二年羅馬に"Il Canto Nuovo"（新歌集）、九十年また"Isotteo e la Chimera"（イソッテ

オ及び怪獣)を上梓し、九十三年ミラノに"Poema Paradisiaco"(樂園曲) "Odi Navali"(海の歌)を公にして忽ち騷壇に覇を稱せり。

然れども、この青春詩人をして、歐洲の文壇に令聲あらしめしものは實に其の小說なりき。初、短篇數種を物して逸早くロオマッサンの俤を傳へ、漸にして寫實の筆、細緻を極むるに至て長篇"Il Piacere"(歡樂)を著はす。ポオル、ブウルジェエの趣を具へて遺ならぬ交の曲折を盡したり。既にしてドストイエフスキイの深刻を學び"Giovanni Episcopo"(ジョヴァンニ、エピスコポ)を著すに及びて世はこゝに其想念の眞摯なるを認め、處女のうしろ遺念の動るさ出でたるを知りぬ。ドアエの名殘ある"L' Innocente"(無辜)も亦然り。上段二篇に抄譯したる「艷女物語」及び「樂聲」は"Il Trionfo della Morte"(死の勝利)の拔萃にして、ニイチェ、ヴァグネルの感化著るしきを以て名あり。主人公ジョルジョ、アウリスピナは物欲に耽りて、歡樂を追ふこと、殆ど病的の名を辭しえざるばかりにて、剩へ自殺の遺傳性傾向ありしを、諸種の因緣によりて、絕えず、死の觀念を脫する能はず、世を倦じ情に暨かず、終にその戀ふる女を强ひて[illegible]に投ずるを全篇の骨子とす、佛蘭西の評家、ブリュンチエルを評して、英佛獨の自然派中最も極端に走れるものなりといふ。

愛欲の苦がみ、閑え、倦じを寫して、深刻の趣を盡したる一章を「艷女物語」と題し、また「樂聲」の名を附してワグネルの樂劇、トリスタン及びイソルデの釋義とも見るべきを和らげたり。ダンヌンチオの文體麗絢爛を以て著はれ、聲調の婉美、句法の搖曳、南歐、溫柔の語を離れて傳へ難く、英佛の作家常に試みむとして效なきを、語數豐ならず、文法、全く異れる邦語を以て靈妙の萬一をだに庶幾せむこと素より望むべからず。而も成るべくは、原文措辭の序を亂さず、聲調の起伏に考へ、用語の正譯を目的としたれば、複雜、隱微にして流暢の姿に缺くる所あるを恐る。しかれども、西歐近世の文字、彩多く言葉豐に、章句輻輳して、部分の美、全篇の妙を成し、全篇の妙又部分の美に分かるゝ纖綿の姿を思ふべきなり。ダンヌンチオ後年の作"Le Vergine delle Rocce"(岩中三女)は淡に妖艷魂麗の妙、蘊に悲壯幽婉の美全歐藝苑の珍たり。

まぼろし

わが夢のまぼろし、書きとゞめむ獨のみの言葉もがな。よの常の物言もて、試むれば、おもぐるしきかたはの文をつらぬるのみにて、あだしびとは、そのおほかたをだに、曉りえざるべく、たゞわれのみぞ、重なれる言の葉のおぼつかなきうしろに、底しらぬ淵の横ふをしるなる。

おもふに、いと長しと見る夢も、實は、束の間のそれにして、目醒、眠のあはひに、心漂へる、そこはかとなき刹那なれや。たゞ幻のかげ、打つゞきて、かはりゆくなる迅さに、あやまたれて、くさ〳〵のことどもの過ぐるをみて、一分の夢も、よもすがらの夢とはいふなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

こゝに語らむとする幻のまことの間は、さはいへど、數秒をこえじと

こそおもへ。われもまたいと短かゝりけりと覺ゆれば、はじめのかたちはうすばりのうしろ、燈火の心をいだすが如く弱き屢々の明滅をもて、てりわたりぬ。

まづ、さだかならぬ光ありて横ふ。うまいより、闇より、無我より、われにかへりたる心をひきつ。

つぎに、この光の、腦よりさしこみて、床の上に、長く曳ける日影となるまゝ、亂れ心地して、わが心嚇ぎぬ。これは、ものとはなく、覺束なきおもひおこしにして、魂の底までも、動かさむとする、なにものかの光のやうに、せきこみたる胸悸こそすれ。

やう〳〵定かになりゆくを見れば、腦は庭にひらきて、入日のかげそこより來れり。噫よ、そぐにの庭よ。いづことはしらねど、棕梠の葉の戰ぎあり。床の上なる光のすぢ、そともの木影は靜かにきれてふるへ

ぬ。――あゝばせを葉のかげ……

かくて、やゝぐらきかたはあかりぬ。――薄影のものもさだかなり。――いひしらぬ身ぶるひをもてわれはすべてを見たり。

ことずくなゝるけしきかな。殖民の人がすむ木造の家のひとまに、て、藤椅子をそなへ、壁龕めきたる上には、路易十五世代の時計をすゑて、其さげふりの音かすかにきこゆ。されどわれ已に凡べて見知れりと覺ゆるものから、いづこなりしかをおもひいだすあたはず。心覺えの、とある隈をおほふ、闇の、とばりのこなたに、もがきつゝ、それをこえて、底しらぬ深みのあなたに沈まむとすれどかひなし。

まことに夕ぐれなり。傾き盡せる入日の黄金のかげなり。――路易十五世代の時計のはりは六時を指せり。――永遠の淵に、なくなりし、いつの日の六時か、はるけきこしこたのいつの日の六時か。

かの藤椅子もいとふるめいたり。その一の上には、百年のこのかた、すたれたる形の、白き藤帽子あり。眼こゝにとまりしとき、述べがたきおそろしの心おこりぬ。……光はひくう、ひくうなりぬ。今は、よの常の夢にある、ものげなき光にあらじ……げしがたし、知りがたし――されどおのづから、われはこの家にゐて、ひゞのわざをとるが如く、今は昔、道遠く海もしられざりけるそのかみの殖民地にゐて、ものがなしき逐客の生をおくるなりけり。

たそがれ時の近づくなべに、すべてのものと、ともに、薄れゆくこのわら帽子を見つむるあひだ、われにもあらで、あだし人の告ぐる如く、さてかのひとは來れりといふ心おこりぬ。

眞やかのひとは來れり、音もなくて、わが後に、かのひとはたてり。くらきあたりに、夕日のとゞかぬへやの隅にかのひとはたてり。ねずみ

地にあせたる繪具もてゑがきたるかたちの如く、おぼつかなくもかのひとはたてり。

かのひとは、いと若きクレオルの、すたれたる、昔の風俗とて、黑き額髮、わざとたれて、頭を暴はしたり。澄みたるまなざし、物言はむとする如く、憂の亂れごゝちと、をさなげなるうちあけとを雜へ、世にならびなく美しとにはあらねど、すぐれてえんにらうたげなり。……しかも、これはかのひとにあらずや。あゝかのひと、音にたてむも、いみじき言葉かな。わが知れるこゝろにて、この言葉を味へば、わが生甲斐のすべて、いひしらず、かぎりなきもの、すべては、こゝに含まれたり。吾このひとゝ相知れりといはむも、既によの常にて、言葉よわし。あらず、あらず。それよりも、すぐれて深し。わが全心は強き力を以て、又かたく結ばれたる如くこを捉へむとしてかのひとに傾きぬ。宛もおくつきの、蓋の下

に、いくとせも〳〵すごしたるのち、わが息をとらへ、生をかへさむとする及び難き爭の如く、胸ふたがりて、いひしらず、せつなし。

* * * * * * * * *

よのつねの夢の間に覺ゆる、いとつよき感は、ものげなき思の絲を絶ちて、夢はそこに破るゝなり。かのよわき絲にして、一たび絶たば、忽ち浮びかつ沈み、人の心の、おひつきて、ひきもどさむとするまもあらせず、うするものなり。虛空にて破れしうすものを、人のとらへむとすれど、及びがたき遠くの底に、風のもてゆく如くきゆ。

されど、いな、この時、われはさめざりき。縷の如く、夢はひきのびぬ。

しばし、二人は、みかはして、物とはなきおそろしの惰力にひかれ、おもひおこしのもだえにて、とまりぬ。眩ろくが如く、うれしくもくるしき如く、かげのやうなる眼をかはして言葉なく、おもひさへなし。……かく

て、眼はまた轉じてなほもおぼろなるかげとなれば、われらはなにとしもあらぬ常のわざをいとなむ如く、このあひた、日はいよ〳〵沈みゆきぬ。今は、殆ど、くらうなりぬ。かのひとは、そともに出ゆけり。われもあとにしたがひて、何の飾もなき白壁の廣間にゆきぬ。――殖民の人の家のならはしのやうに。

、クレオルぶりの上衣つけて、そこにまちゐたる女のかげも、わがよく知れる人のやうなり。かのひとに似て年老いたれば、疑もなく其母なり。二人の近づくなべに、たちあがりて、いひあはすともなく、ならはしのやうに、みたりして、出ゆけり。あはれ、時もなく、音もなく、影のやうに透きたるみたりが、夜よりも色なく、とりあつめたるたそがれの空に、この世ともなきこゝちして、動きたることを、せめて、かたはなりとも、いひあらはさむとすれば、いくその言葉、いかばかりの長きものいひを費さ

むとすらむ。

われらみたり、つれだちて、大樹の陰にたてたる、殖民地の家の間をすぎ、たそがれの悲しき、悲しき小路をゆけり。かなた遠く、海のけはひす。國を離れ、さすらへる如き思あり。これは百年のむかしのマルティニク、レユニオンの小路とおぼしきに、まして太明、西にながれて、うらがなしく、なきひとの住む薄闇の光たど〳〵しきをや。大きやかなる鳥はにび色の浦にとびかふ。よもは暗けれど、これは入日の名殘なる黄昏にたがはじ。たしかに、われらは日毎のならはしを行ふなり。暗まさりゆけと、まだ夜ならぬ夕ぐれのぞゝろありきするなり。されど、かく思ひ染みたるわがおもひも、やう〳〵きえゆきて、ふたりのをみなは、みえずなりぬ。今はかたへに、輕く柔かなる二の影ともなへりといふほかは、あらず……さて、やみぬ。すべては、うまいの眞の闇に沈みて、とこと

はに、きえたり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

この夢の後、ながく、ねむりぬ。ひと時か、ふた時か、われしらず。さめたる時、心の歸りたる時、はじめて夢をおもひおこしたる時、胸は、にはかに騷ぎ、眼ひらけて、とみにわれにかへりぬ。わが思ひおこしは、まづ椅子の上のわら帽子より、かのひとに移り、かのひとのわが後に立ちし情極まれるあたりより、やう〳〵しづかに、ほかのことどもを、めぐらしえたり。とくより見知れるかの室の、いと詳しきさま、其かげにて窺ひたるかの老女、あれたる小路のそゞろありき、われはいづこにてこれらを見、これらを慕ひたりしや。こゝろうら悲しく、おもひやすからで、必ら。ず求め得べしとは知りつゝも、いそぎて、わがすぐせをたづねめぐらせり。されど、いな、空なり。わが生に何のにたることもなし……

人間のかしらは、縺れたる苧のやうなる無數のおもひ草にみちて、その幾萬も幾萬もは、暗き片隅にかくれて再び浮びいづることなし。唯これらをふりうごかす幽玄の手は、眠に先ち、またつゞく靜寂のをりから、時として、かの颱なる捉へにくきものを、飄へし出すことあり。されば、わがかみにいへりし幻は、とことはに歸り來らざらむ。又はある夜いつかかへることありとも、かのひと、逐客の地とには何のかゝはりもなくて來らむ。そはこれらの事實はわが頭と何のたづさはりもなければなり。このまぼろしは、わが夢のさめたる時にやむべき破れ糸の終の層なり。その始終は久しきむかし、土にかへれるあだしびとの頭にこそやどりしなれ。

わが祖先のうちには、海をゆきし人あまたありて、其一生も行も今は定かならねど、われはおもふ、いづこともしらぬ殖民地のあるちいさき

おくつき處に骨ありて、そは蕈帽子もてる黒き額髮のをとめの名殘なりと。わが祖先のひとりに物思はせたるかのまなざしの媚はわれに於て、をはりの光を放つばかり强かりしなり。ひねもすわれはかのひとをおもひぬ……いともあやしき愁をもて。

（ロティ）

屠牛

印度洋のたゞ中、とりあつめたる夕、夜嵐のまさに起らむとする時。あはれなる二頭の牛は殘りぬ。海上の料にとて、新嘉坡に求めたる十二頭のうちなれど、西南の惡風に船路の長びかむをはかりて除しおきぬ。

憐れにも痩せ衰へたる身哉。船體の動搖に皮擦れて、骨だつあたり肉叢はに、今は歸り難き彼方の牧場に背き、かゝる惱ましき船路の幾日

も、角もて短く繫がれたれば、冷たき潮のみづあび毎に、頭俛れつゝ、絶念の色あるこそ痛ましけれ。うら悲しき眼して、鹽に濕れたる牧草をならひ食らふは、犯し既に定りて黥され、いきものゝ數より逐れたるのみか、死に先ちて、なほ苦みある罪人の姿なり。寒さに惱み、濕るゝに惱み、痛に惱み、凍に惱み、また恐に……

この夕、つねよりもなほうらがなしく、海ゆく人のよく知らむ、蒼白の愁雲、落日のあたりを蔽ひて、心細かる夜のたゝずまひ、風もふきいでぬ。かの國遠み、はてしなき海原のもなかにして、孤りおもへば憂愁のかぎりなる地上のたそがれも、なにかあらむ……しかも牛は靑野牧草のものなるを、この漂へる寂寞の野にして、里ばなれの愁、ひとよりも深く、われらのやうに望もなければ、靈智いと鈍きながらに、身にふさはしき哀れのなやみ覺えて、そこに近づく末期のかげを見るらし。

力なき巨眼は、悲しき海のはてに注ぎ、病人のやうに、やをら、にれがめり、つれはひとり〳〵傍の甲板に仆るゝを、二週このかたのさびしさ堪へがたく、よりそひて動揺のたびごとに支へあひつゝ、友の愛もて角を交へぬ。

こゝに料理方は、細板の上なるわれに近づき、例の如く、船長よ、これより牛屠らむといふ。はらたゞしき料理人かな。確かに、汝のせいにはなけれど、わが心おもしろからず。運はこの航海の初より拙く、いかなればいつもわが番の時にのみ屠牛あるか。細板のうへしたをありき、眼を遠きに放ち、よそごとを思ひやるも、角の間をうたれ甲板の環に繋がれたる低き額を打れて倒るゝ音には耳ふさぐ能はじ。骨の拙くる狀にて、甲板にくづをるゝ音あり。皮は直に剝がれ、四肢所を異にし、悪臭内臓より發して、よもは血に汚がれ不淨に染みむか……

屠殺の時は迫りぬ。撲殺のため水夫は環のあたりを圍みぬ……二頭のうち、反抗のわづらひなき衰へたるを選びぬ。

このときあとなるは、頭めぐらして、眼うらめしく、先代の仆れし不幸の其かどに曳かるゝを見やりて、かれは悟りぬ。汗はにれがみの牛の低き頭ににじみ來て、一聲助を乞ふ……噫牛のうめきよ、つねにたとしへなき哀れおもはするもこれ、わが曾て耳にせし極みなきあやしの聲もこれ……そこには人間のすべてに寄する重き非難、胸ははり裂く絶念の姿もありて、其歎のやうなく、其訴のきこえざるを知りてかいひしらぬ怵へ心いきづまりあるも悲しく、むげに思を棄てゝかく云ふに似たり。「さては……草に走りし故里のあなたより、つれだちて終りの日の友なりける彼れにも、免れ難き時こそ來つれ。わが時も、やがて來らむ。而も世は彼をもわれをも慰むなし……

嘆われに憐れみはありき。物狂ほしき愛はとみに起りぬ。わが心急に動きて、此醜き頭を捉へ、相抱きて胸にあてむか。人は此わざとならぬ身振もて、惱める者、死ぬる者を慰め、かりそめに守りの心を傳ふ。

されど、この牛に何の救もなくて了ぬ。かくまで深く其聲の悲を知れるわれも、實は手を束ね他を顧みぬ。……さにあらずや、一匹のけものの爲に船路のあては轉じ難く、三百の人間に鮮肉は否みにくし、たまゆらのかゝる思も、しれ者のそれとや笑はれむ。

されど、此聲を心の底に聞きし者あり。船部屋のこものにして、其あはれなる孤獨の命、おそらくはこの牛に似たりけむ。彼は徐に近よりて、鼻頭かいなづ。

慰めむとしてはかゝる言葉も、のぶべきか。

「ゆけよ、心安かれ。あした汝を食ふ人、猛きも若きも、凡てかくは死ぬ

るなり。思ふらく、其末期に當て惱は汝よりもつらく、長かるべく、眞向のひとうちを羨む可きか。

牛は眼ざしを和らげ、指を嘗めて、この愛憐に報いぬ。而して萬事休せるなり。低く閉ぢたる頭の一刹那、靈智の光きらめきて、かつ消えぬ。船のあし、益迅く、海原のたゞなか、狹霧のうち、宵は時雨るゝ夕まぐれ、友は既に形なき數塊の肉となりて、鉤につるされたる傍、今は靜に心なく、にれがみすなり。あはれの牛や。束の間の靈智はこゝをこえずして、既に思ふなく、顧るなし。

（ロティ）

足弱車

といさんかいさん、老いたるめうと。

老いたる、老いたるこの二人を、歳久しくも、人々見かけぬ。長崎の故

老も、その若かりし日の覺だになしといふ。

街にいで、物乞するに、眼盲たるといさんは、小車の箱に足痿のかいさんを載せて、輓きあるきぬ。

昔しは鳩さん、梅さんの名もありしといへど、今、はた誰も忘じ果てつ。

日本の語にて、といさん、かいさんとは、父母を呼ばふ幼兒の優なる言葉にて、ふたりが高齢のゆゑをもて、人皆かくは呼び習ひしか。またこの禮篤き國に、用ゐなれたるさんといふ言葉は、なにがしうち、某の夫人、例へばムシウ・ババ、マダム・ママンなどいふ尊稱辭にして、日本のいとちいさき幼兒も、この禮式を怠ることなし。

物乞ふさまは、いと慎ましげにて禮をかゝず、なめげなるねぎごと、わづらはしくも人を惱ますなく、たゞ何の言葉もなくて、手を展ぶるのみ。その手、あはれげに皺だみて、木乃伊のひだをさながらなるに、人々、米、魚

がしら、冷たる汁などを與ふ。

日本のおほかたびとゝ同じく、かいさんは、なりいと小さげに、小車の床に折れかゞみて、なかば死したる足先も、歳月の久しきに枯れ凋みぬ。

足弱車のすわりわろく、往さきるさのえい、さらさ、ゆすれまろびも多けれど、道はいそがぬといさんの心づかひも淺からず、妻は聲もて導くに、夫は耳を欹てゝ、肩には革紐たすきにし、地づらに杖をたゞきつゝ、かくは、とこしへの暗を辿りて、かのさすらひの猶太人のやうなる路を志す。

殊に難澁なるは、段をのぼり、小河を越し、あるは谷間の細路づたひ、荒れたる舊道を拾ふ時なり。といさん、いかにして、其道をたどる……車の床にかゞみたる老女のさまこそあはれなれ。落ちゐぬけはひ意地らしく、老の齊の眼さへ、案じ煩ひ輝きつゝげに覆りの恐は、一生の夕を惱

ますもの、一なりけり。

互におもひあふ尉と姥との頭、何ものか、そのうちに往來する。宵々の靜なる物思どき、互に何をか語りあかさむ。眠る伏屋の軒のもと、淺黄木綿の手拭に、かゝさんの髪つゝむとき、若き世のいかなる思ひでや、浮びいづる。明日もまた先の日と等しなみにして、同じき口すぎの爭、同じき老衰、同じき薄運を繰返すべきさすらひの路を案ずるか。かれらなほ歎ありや。望の、いとせめて、微かなる名殘だにありや。たゞの思ひ事だにありや。いかなれば、なほ命を吝むぞ、地は既に二人を迎へむとばかり、惱もなく二人を解かむとばかりなる今に及びて。

宮寺に行ふ宗門の祭にはいつもまうのぼりつ。

靈場に影おとす杉の大樹の木下暗、石彫の古像、相形おそろしきもと、

まだきに座を占めて、參詣の信徒に先てば、かくて、ひねもすの群集おほかたはこゝに足駐む。人形の姿、小猫の眼ざしなる娘たちは、高き木履をひきずり來り、色がはりの裾長く、顏可笑しげなるべべ、ニッポン手をひきつれて信心まゐりし、ゆひ髪ふくよかに、けしきばみたる美色の群は五重の塔に祈り興じつ。または髪長き農人、あるはあきうど、佛僧、この樂しげなるちいさき民のあらゆる人形は、まだ眼の見ゆるかゝさん、眼既に盲たるとゝさんの前をゆきゝす。いづれも優しき眼して通れど、をりふしは脫けいでゝ、志を興へ、おやさへなして過き行くは、身柄ある人に向へる如し。二人はかくまでもよく知られたり。又この帝國の人はかくも上品なり。

かうやうのをりから、もしそれ、天朗に、風暖く、乾きしぼめる肢のした、老の惱のやゝ、收れば、祭の賑におのづから、ほゝ笑まる。輕き笑のさゞ

めきに催されかゝさんもやう〳〵浮きいでつ。ゆきゝ女の品づくり
をまねはかなき紙扇など弄びて、わが世の盛りも過ぎざるかのさまつ
くろひつゝ、人みなのやうに現し世の快樂を味ふが如し。

されど、夕ざれば、杉がもとに闇は落ち、寒さとりあつめきて、宮居のめ
ぐり、仁王の山門、ものとしもなく神寂びて、畏しこければ、翁も媼も重り
伏しぬ。晝の間の疲れ、内より身を食みて、皺のうねりもいとゞしく、腐
のたるみもまさりきて、なべての姿は、恐ろしの不幸、死期近き惱を湛ふ。
幾千の燈火、影黑き枝をすきて、二人のめぐりを照らし、信徒たえまな
く宮居にみつ。怪しくも浮きたる歡樂の音、群集のうちより破れ、大路
に、靈場に、とよみわたるは、この宮の守護なる身動なき巨像のすぐ立、麗
麗としてさき知らぬ夜のかしこさと照りあふ。祭はよあけがたに及

びて、神靈に對する大なるあてつけの如し。しかもにがみなく、稚くま
めやかに、殊には堪へ難くおもしろきあてつけぞ。
されど、これ二人にとりて何かあらむ。日ひとたび沈みて、この人間
の藻屑を活かすものなし。今はうちみも見苦るしく、病みたるパリヤ
の如く路のべに蹲り、老いさらばふるあはれの猿猴のやうに、施物の殘
などものす。おとろへのむくろに苦痛の擴れるを見て、二人はやゝ永
遠の不思議に思ひわたれるか。誰れか知る、老いたる日本のこの頭に、
何ものゝ往來するを、あるは恐る、何ものも無からむ……たゞに命を繼
けむと爭ふのみ。細き木箸もちそへ、やさしくも助け食ひつゝ、寒を凌
き露をさけて、明日もまた世に殘り、ひとりは他を曳きありくさすらひ
の同じ道に上らむとはすなり……
小車のうち、かゝさんのほか、世帶の道具少しばかり、瑕多き瀬戸の碗

は米を容れ、小さき盃に茶を喫し、鬼燈提灯は闇をてらさむ。

週にひとたび、盲人の夫は、心を籠めて、かゝさんの髪を梳き、鬢をあぐ。老女の手既になえて、日本ぶりの髪ゆふ能はず。すなはちとゝさん代りて學びぬ。指うちふるふ手さぐりに、あはれなる媼の頭を撫づれば、涓きしなだれて、解くにまかせたる、あさましくも猿猴の互に化粧するに似たり。髪はまばらに薄ければ、とゝさんのわざとてもいと易く、冬の椿榔の皮のやうに、皺みて黄なる羊皮の上、梳く可き髪もあらざらむ。

さはいへ、まづは日本の好にそろへ上げて、ともかくも鬢はひきいでつ、鏡のかげに見送りて、とゝさん少し上のかたゝいや少し左、少し右と語ら ふ程、馬爪の笄二本をさしこむ。ゆひ髪の趣こゝに具り、しかるべき老媼の姿もでき、ずゐものづくり女人形の硬き横顔も生じぬ。

また物がたくも、日毎に行水す、日本は何事もかく禮あり。

過ぎこし、いつの日よりか繰返しけむ此行水もすまし、死期の近づくにつれてわづらはしさのまさりゆくこの化粧を終ればせめては清き冷水によみがへり、朝けの風すが〳〵しきまゝ、安靜のすこしは感ずるか、いかに。

さてもおもへば、うれたき不運よ。よひ〳〵のあけ毎に、悲はそひ、衰まし同じき歩、同じききしり、同じ音なるゆすぶれの疲、おびたゝしく、老衰を白日に露らし、小車のつきせぬ逍遙にかしまだつ。いつも〳〵、街をゆき、町はづれをゆき、村々をゆき、遠里にゆく、森かげの鎮守の祭にまうでむと。

みかどの大路ゆきちがふよつ辻、朝まだはやきに、意地わろき死は老いたるかゝさんをつかみぬ。

四月そら晴れ、日明に、青野のたゞなか。

九州の島の春は、われらのよりも暖く、やゝ早くして、ゆたけき野山輝きわたりぬ。二條の途、平野のもなかにゆきかふあたり、天鵞絨なす稲田にそよかせおとづるれば、蒲黄ぷらしにともぬきの波たちぬ。よもは蟬の樂にみつ、その聲日本にてはいとかしまし。

路のべの草むら、杉のむらだちにそひて、墓碑十數、角なる石に刻みたる佛陀は、蓮華の臺に趺座したまふ。稲田のさき木立みゆ。われらの國の樫の森をさながらなれど、紅白の花房まじゆ、一重椿のさかりなり。細き葉末みえがくる竹林の戰ぎなり。さては、末はるかなる遠山のたたずまひ、圓閣の小なるに通ひ、圓塔の低きに似て、わざとらしけれど、すぐれて雅びなる姿を青空にゑがきぬ。

しづ心あり青草あるこゝのまなかに、かゝさんの車はいこひぬ。終

のとまりなり。蒲黄木綿の裾長く、袂短き農民男女、まめやかなる日本の賤の子ら二十有餘、足をとどめて小車の床をめぐるに末期近きて老女の手つりかゞみぬ。觀音の御寺詣にと、とゝさんの曳き來れる路上の變事なり。

なかば物見だかく、なかばは憐れがりし人々は、介抱のすべに思ひ惑ふ。おほかたは大悲大慈觀世音の開帳にまうづる人々なりけり。

あはれやかゝさん、あるは燒酎ふくませむとし、あるは鳩尾に藥草ぬり、または小川の冷泉をうなじにそゝぐ。

とりわけ惑ひたるとゝさんは手さぐりに撫でむとして、諸人の介抱を妨げ、心痛のあまりにぞ手足わなゝく。

やがて女の一人は、袂より誰符といふ紙をとりいづ。驗ある咒文を書きつけたるを小球にして嚥ましむるに、恨みや甲斐なし、期すでに極

りぬ。影形なき死はこゝにありて全日本の鼻先にあざみ笑ひて、用捨あらせず老女をつかみぬ。

斷末魔のつりかゞみ、痛しき限なり。かくてかゝさんは事締れぬ。口少しあき、半横ざまに箱のそとまでも、のしかゝりたるさま、遊すでに終りて、人形のすてられたる如し。

この臨終の幕ありしうしろの墓地は、神明つとに定め給ひ、死みづからの選びおきたるものか。是に至て何の躊躇かあらむ、通行の人足に命じて、土ほらしむ。參詣に後れざらむともし、またこの貧者に葬の事か、すもうしろめたければ、いそぎ行ふ。まして日は既に中し、汚なき虫どもの集りくるをや。

半時ばかりにして、穿ち終ぬ。肩をもちて亡者を箱より出すに、足をりかゞめたるも常の如く、宛も森の木下陰、狩人の折ふし、めぐりあふて

ふ老衰のましらに似たり。

亂れ心地のとゝさんは凡てを自ら爲さむとて、足手まとひとなるをも知らず、人足風情の氣あらきものには、押しのげらるゝも道理なり。盲眼、涙はふり落ちて、小兒の如くすゝりなく。永遠の住居に移るべく、わが妻の化粧ふさはしきか、髮の整いかならむ、せめては土を投け入る る前、かの粧をさしかへむとあせる。

樹の間かすかにものゝけはひす。かゝさんのみおやの靈は物陰のとこ夜の國にその來れるを迎ふ。

臨終のとり亂しにて咎め難けれど、老女は尾籠なることなせり。されば人足ども嘔吐のあまり、蒲團、きがへのぼろ、小茶碗提灯さてはこれも汚れたりといひて、かの車をさへ埋めむとす。

あはれや、とゝさん、身も世もあらず、かたみの品を奪はれじと、涙にく

れつ、氣も遠く、地に投げ伏してくづをれぬ。

これも、祭禮の宮居に施うけむとにや、老いたる一人の女乞食、憐催して、足をとゞめ、それ、凡て、前なる流にすゝがむといひいづ。

群集は散りて女神の宮にゆきぬ。蟬の聲のみなる青野の寂寞に、たゞ二人の乞食を殘して。

さては物乞の女、すべてを、かの清流に洗ひすゝぎて、車も箱もきよめたり。かゝさんのおりものは、流れて川添の青草を育て、新雷既に綻びて、長夢のあえかなる蓮花大輪を養ふ。こゝにつゞれを梢に干して、夕ぐれまでに乾きたれば、すぢめよくたゝみたり。とゝさんは今道にのぼりうべし。

腰うち起して、ゆかむとするに、常の習の車びき、ながく其床のからなるを如何せむ。友の如く、介添の如く、おのが心おのが眼ともある人に

わかれて、心細さの限なり。俾むに堪へたるゐのこりかな。天命の終らむまで、ひとり手さぐりに、あてもなく、望なく、いやくらき夜をもゆくか……

星のしたにくらみゆく青野をかけて、蟬の聲まだをやみなく、終に、まことの夕闇の盲人のめぐりに落つるとき、げさと同じき聲を木間にきく。即ち精靈の聲なり。「心安かれ、とゝさん、われらも住み、なれもやがて來らむ寂滅境に、かの人は今靜にやすみたり。身既に頽へず、老いたらず、そは死にたればなり。打見の忌はしきことなし、つちの養ひとなりたれば地に戻りて淨し。かゝさんは日本の美しきうゐものとなりぬ……杉のみづえに……椿の花に……はた竹藪のすゞしきに……

（ロティ）

佛蘭西翰林院學士ピエル・ロティ Pierre Loti（實は Louis Marie Julien Viaud）は千八百五

十年一月十四日ロシュフォオルに生れ、十七オにして海軍に入り、支那沿海に轉職し、又南海に遊び、わが日本にも來遊數度に及びぬ。千八百七十六年 Asiyade の作ありしより、著述十數種、漸く等身ならむとす。千八百八十六年作「イスランド漁夫 Pêcheur d' Islande に於て、近代佛文の最も幽麗なる最も嬌美なる物じ、また翌年「お菊夫人」Madame Chrysanthème 八十九年「日本秋景」Japoneries d' Automne 等の著あり。邦人の記憶に上りぬ。

譯述の三篇は九十一年の作「悲愁錄」Le Livre de la Pitié et la Mort のうちより拔萃したる秀逸にして、著者が獨得の奇哨なる觀察、微妙なる多恨の感を顯はしたるもの、就中「まぼろし」の一篇ものとはなく、悲しげに、寂しげなるを覺ゆ。わが英文學の師小泉八雲氏(ラフカディオ、ハアン氏)曾て西印度の波に浮びて、とある島陰の墓地にたちより正しく、かの「いづこともしらぬ殖民地のあるちいさきおくつきどころ」を見たれば、背をロティに寄せて、この文の粉本なりやと問ひけるに、否、これたゞわが想象の生みしところ、かつて、さる墓碑の存在を知らざりきと答へぬ。暗合の奇緣、愈〻この文の幽妙を增したりといふべし。

文反古

こゝちなやましう、床はなれがたく、窓には時雨、毛蒲團のあたゝかきに、熟すこしありて、うつら〳〵夢見くらし侍り。枕もとのふみも、身にひきあてゝをかしく、其名きこえあぐべきか。いなしかり給はむもおそろし。よみはてゝまたおもひに沈みぬ。されば、すこしつけまゐらせむ。

えりに枕かはせ、起きなほりて、いつぞや給ひし小机を臺にて此文かきまゐらす。

床につきてよりけふにて三日なれば、おのづから此床をこそ考ふれ。夢のうちもなほこれを思ひ侍り。

君よ、げに床こそ人の一生なれ、生るゝもこゝ、臥ふるもこゝ、死ぬる

もまたこゝなり。われにドゥクレビョンぬしのふでであらば、床のはなしといふものかゝまほしや。驚かれぬるおそろしのこと、えんなることは又心動すこと幾何ぞ。何れの誠かこゝよりひきいだしえざらむ。衆生の救こゝに籠れり。

わが床よく知り給ふ君もすぎし三日のあひだ、われこゝに思ひいでし事、露曉り給ふまじく、又此床の一ぎは好ましくなりしゆゑをも、察し給はざるべし。まことや、今まで覺えざりしかど、なにものをか殘し置きたる世々の人は、けふも、なほ、この床にすみ、この床に通ひておもかげにつとそふ心地し侍るなり。

あはれ、由緒なき新たなる床もとむる人の心なさよ。われのは、われらのは、かく古び、かく手なれて、大きやかに、生より墓に至るいくその命をや支へけむ。四の柱のうち、几帳の下に起れる幾何のうつりかはり

心に浮べさせ給へかし。こゝに來て三百年、この床なにごとをか見たる。

こゝに若き女横れり。をり〳〵といき洩しつゝすゝりなきするに、老いたる父母は其わきに立てり。とありて猫の如く泣く屈まりたるちいさきもの生る。これ人の始なり。女は、わかき母は、悲しげにもまた悅しくて、うぶ聲のねにひしと胸ふさがり、かひなひろげて此幸にむせび沈めば、あたりのものも喜びの涙にくれぬ。げに、ことわりや、今生れたるこの小塊こそつゞき榮えむ家系ならずや。老いたるやからの血なり、魂なり。

……

……………………………………………………………
……………………………………………………………
……………………………………………………………
……………………………………………………………
……………………………………………………………
……………………………………………………………
……………………………………………………………

ふるとし、よみきかせ給ひし歌、そこにはまだ覺え居させ給ふか。古き集のなりといふ。ロンサルのにや。

Et quand au lit nous serons
Entrelacés, nous ferons
Les lascifs, selon les guises

Des amants qui librement
Pratiquent folâtrement
Sous les draps cent mignardises

ピラモスティスベエとこしへに眺め下ろす几帳の綾に、この句織出さばやとねがふなり。また思ひ給へ、この床の上に臨終の苦悶、神に訴へたるものありしを。これぞ望の終なる。人を世に出し、床は、やがて、萬事休するかどなり。叫喚あり、苦痛あり、もだえ苦むもの、過ぎし昔を慕ひて、さしあげたるかひな、永遠に終りにたる歡樂を喚かへさむとする絶叫、息絶ゆるのんどの聲、顏しかみ眼ひるがへるいまはの姿、あゝこの三百年の床は閲しぬ。

　まことや床ぞ一生の姿なる。われこの三日にてかく曉りぬ。げに床のそとによき事はなし。

眠も、また、わが世のいと幸なる時ならずや。
されど、人の惱むもこゝなり。病人の隱家、老さらぼへる身の苦むところよ。
床は人間なり。われらが救主イエスの君は、人間の性うけたまはざるしるしとて、いつも床の用を感じ給はざりしごとし。この君、わらの上に生れ、十字架にうせ給ひぬ、われら人間にのみ柔く靜なる床をたまひて。
思ひしことなほさはあれど、かいつけむひまもなく、又すべて思ひ浮ぶるもむづかし。つかれたれば枕はづしてあほむきに少しねむらむとこそ思ひ侍れ。
明日三時尋ね給へかし、病おこたりて君と相見ることかなはむ。
さらば、さらば、わが君。くちづけしたまふ爲に、この手さしのべたり。

また此唇をこそ、いざとばかりに。

（モオパッサン）

ねろり火

あつき窓掛の客間、香のにほひゆかしく、廣き暖爐には火いと熾に、爐額のすみにすゑたる燈火は、なえたるれいえすの傘の影より、柔き光を落して、靜やかに語る二人を照せり。
あるじの女は、髮白きおうな、天色の背忍ばるゝ、皺なき肌の薄葉めいたるに、年ごろの化粧染みたるか、人もしその指にくちづけなさば、ふろれんしや菖蒲の粉おしろいの蓋あけたる薫やすらむ。
男はふるき友、今にひとり身の徒然には、日毎訪ひ來て、一生の道づれ、ほかに何のこともなし。
言葉とだえて一分ばかり、二人はねろり火をみいりて、ものとはなき

夢心地に、かのかたみをもてなさむとて、絶間無く物言ふやうもなければ、默しぬ。

忽ち一聲、燃えたつ薪一枝、爐のそとに轉じ、火箸臺を越え、絨毯の上にまろびて、火花を散しぬ。

老女、聲あげて、飛びのかむと身がまふるに、男は足にて火團を爐中に蹴込み、ひろがれる火花を靴底に蹈みにじりたり。

ことをさまりて、烟のにほひ、一間にみちたる時、男は友の前にすわりて、笑をふくみ、入れ直したる薪をさして、語るやう、これこそわが獨身のいはれなれ。

愕然として眺め入る女の眼は、ものみ高き女性のそれなれど、もはや若からぬ星眸の好奇心は、慮り深く、こみいりて、時にはひとわろき眼ざしなり。そは何故なればと問ふ。

男は答ふ。そはひとつ話なり。悲しき厝はしき物語ぞ。

舊知のものは、わが親友ジュリヤンとわれとの間に、友情急に冷えしを怪みぬ。さきの離れ難き親友の、いかなれば忽にして見ずしらずのきはとなりしか。なかたがひのゆゑよしはこれなり。

はじめ二人は、ともずみの交むつましく、ひと時も離るゝなく、何ものも放つまじく見えたるを。

ひと夜、友は、つと入り來て其結婚を告げたり。

時に、われはひしと胸うたれて、盜まれし如く、誑かれし如くなりき。

友に妻ある時、萬事休す。そは凡ての終なり。女の物妬みする愛は、うしろめたく、騷がしく、肉の性を滯びて、男のすなる强き、うちあけたる心の、情の、信の愛をゆるさじ。

みたまへ、男女を維ぐ戀の絲の、いかにつよくとも、かれらは精神に於

て、とこしへに他人なり、二人は敵國ぞ、異人種ぞ。ある時は男のかた、ある時は女の方、いづれか、一人は御する者、他は御さるゝ者、主なり、奴なり。同等の人にあらず。かれら手を交はせば、指おのづから熱にふるへて、寛かなる、強き、信ある握手なく、心を露して裸ならしむる雄々しき愛なし。されば聖人に妻なく後なく、やがて親をも棄つる子等に老らくの慰めを置かで、男ならでは行はれ難き思想の交に世を終るなりけり。

さるほどに、ジュリヤンは娶りぬ。あいぐるしきブロンド、金髪波うちて、才氣あふれたる肥りじゝの、たゞ夫を崇むるに似たり。

睦しき間を憚りて、始のほどは訪ひ尋ぬること稀れなりしが、度々の案内にぞ、ひたすら、なじめよ、親しめよとばかりなりし。

やう〳〵この睦しき暮らしにひかれて、會食のをりも重なりければ、家にかへりて、獨身の今更に味氣なく、われも妻をとおもふ夜もありけり。

二人は愛に醉ひて、家あくることもなし。さて、ひと夜、ジュリヤン來りて、げふも會食せむと誘ふに、さらばとて、尋ねゆきたるときいふやう、こよひ用ありて近きあたりにものすべければ、君は止まりて、ベルトの淋しきを慰め給へ、十一時に歸らむ。

若き妻も笑ひつゝ、君をしひてひきとめまゐらするはわがいひだしなりといふ。

乃ち夫人の手を執りて、何時もながら、優しきおん言葉かなといふに、情籠りたる長き握手を感じぬ。われはなに心なきふりせり。かくて卓につきぬ。八時のころジュリヤンはふたりを殘して外出せり。

かれ去てのち、怪しき氣づまり、にはかに起りぬ。日毎に親みゆく交にも拘らで、かくむかひゐては、物新らしき心地して、心苦るしき無言を

つくろはむ爲め、まづは心にもなき世ばなしより、何とも定らぬうはさに及びたるを、女は答なく、わが前に坐して、爐邊に添ひ、頭は俛れて、そこともしらず、伏目がちに、片足を火にかざして、むづかしき思に耽りたらむやうなり。雜談もつきてさて默しぬ。あやしいかな、話柄を求むるの難きは。かくて事珍らしき何物か、眼には觸れねど言ひ難き何物か、あたりに浮びて、人より人に及ぼす、喜き、惡しき、心の奥の密事を透見する胸さわぎしぬ。

心苦るしきこの無言數分ばかりにして、ベルトは靜に、見よ、もえさがりたれば、薪そへ給へとあれば、函のなかより太ときを擇びて、殆ど燃えつくしたる木の上にたてかけたり。

無言またつゞきぬ。

や、ありて、爐火もえあがり、からだも熱するばかりなる時、新婦はあ

やしき眼して、今は熱きにすぐ。かなたのねいすにたまへといふ。

かくて寢椅子にうつりぬ。

その時、ひしと眺め入りていふ、君ならばといふ女の迫りたるとき如何にしたまふかと。

驚きぬといふも愚なり。おもひもつかぬおん問かな。曾てさる場合を思ひたることなし。又その女にもよるべければとそらしぬ。

女は笑ひぬ。乾きたる、迫りたる、ふるへたる笑なり。肉薄き玻璃のうつはをも壞つべきつくり笑なり。

男は心なわきものかなとありて、默せしが、暫らくしていふ。

ポオルの君、これまで女を思ひ給ひしことありや。

われは然りと答へたるに、なほ、さらば話し給へと求めたれば、さる昔のかたらひを述べたる時、卑み、侮りのけはひ見せて、急にいふやう、あら

ず〳〵、君は戀知り給はじとこそ思へ。まことの戀は、心を覆し、思を苦め、頭を亂さずむばやまず。いかにいはゞよからむ。――さなり、危きを冒し、恐しきを忍び、殆ど罪をも犯し、倫を亂したる不義ならざるべからず。神聖なる障礙を破り、法を破りて、親子の情をさへ蹈みにじりてこそ戀なれ。靜なる、たやすき、危險無き、合法の戀よ、何のおもしろみぞ。

答ふるに辭なければ、心にこの哲學めいたる句をずしぬ。曰く噫これなるかな、女人の頭よ。

物語のあひだ、女は何心もなき僞善のあどけなさを粧ひ、蒲團にねより、横ざまの樂寢に、頭をわが肩にもたせて、裙少しあげ、赤き足袋のはしほの見えたるを爐火をり〳〵照らしぬ。

しばしありて、君はわれをおそろしと思ひ給ふかと問ひけるに、否と答ふるとき、頭をわが胸におろして、うつむきたるまゝ、われいひよらば

何とし給ふと、口きくひまもあらばこそ、頸に腕を卷きて、早くもわが頭を近づけ、ふたりの唇は一となりぬ。

噫わが友よ、その時のおもひ戯れにあらざりき。ジュリヤンをあざむくべきか、この狂ほしき心くねりたるたはれめの思ひものとなるべきか。一人の夫を足れりとせず、おそろしくもみだらなる女の戀人となるべきか。禁じられたるよその木の果なりといふばかりの面白さに迷ひて、危を冒し、友をあざむく可きか。いふ迄もなく非なり。されど、まのあたりを如何せむ。徐世夫にならふべきか。げにおろかしくも難き役かな。女は欲きはみなく心ふとく、ものぐるほしくふるへたり。あはれまゝにせよといふ女の味ふかきくちづけを覺えざる人にしてわれにはじめの石を投げ給へ……かくて一分の、ち……察し給へ、さにあらずや、一分の、ち……われは……否女は……嫣然たる一聲にと

びのきぬ。

爐火は薪は客間に飛びて、火箸を仆し絨毯をやき、椅子の後に落ちて、もえあがらむとす。われは狂人の如くとりみだして、終にもえさしを爐中に收めし時、戸は急に開きて、ジュリヤンの笑顔あらはれぬ。用はすみたり。二時ばかりはやく終れりといふ。

げにこの薪なかりせば、われは現行のおかしに捕はれけむを、其結果、察し給へ。

われは、ゆめ〳〵かゝる境に再び身をおかざるべし。其後友のにはかに冷になりしは明にかの妻のわざなるべく、會食のまねきもとだえ、今は相見ることもなし。

われ終に娶らず、怪むべきにあらずかし。

（モオパッサン）

開祖ギュスタヴ、フロオベエルの衣鉢を傳へて、佛蘭西自然派の領袖たりしものを求むれば、たれも、このアンリ、ル子、アルベエル、ギイ、ドウ、モオパッサン Henri René Albert Guy de Maupassant を推すべし。千八百五十年、八月四日セエヌ、アンフェリウル縣ミロメニル莊に生れ、九十三年、六月七日巴里パッシに逝きぬ。長篇の小說には Bel Ami（一八八六）Pierre et Jean（一八八八）Fort comme la Mort（一八八九）Notre Cœur（一八九〇）等ありて、短篇の清楚なるもの、奇峭なるもの、深刻なるもの、冷酷の自然力を寫し、悲愁の世間相を述べ、寸毫の矯飾なく、無用の修辭を卑みたる單稚の類、多く凡俗の痴態、近代の暗潮、殊に愛慾の根がたく、濃多く、しうれく、絶ち難きを題材として、恐懼なき健筆を現代の寫實に用ゐぬ。

上の二篇は、單にこの作家の一面のみなれど、平淡の言葉のうしろ、奔放の情熱横はるをかいまみうべし。

南露春宵

ウクライン のよるをしれりや。あはれ美しきかの夜をしらずば、はやくゆきても見給へかし。なかぞらに月はてらしぬ。みるがまにひろがりたる蒼空の穹窿は今や、てりわたりて、息するやうなり。白銀の波、大地にたゞよひてうるはしく、空氣はあやしくも息ぐるしきまでかぐはし。やさしきいたはりはあたりにみちてにほひのうみのふるひ動ける。

かうぐしきよるのけしきかな、物くるほしう美しきはこよひなり。靜なるこの夕にも、命は空にみちたりどおぼしく、をくらき森は、やみにそよぎて、田の面に落せるかげくろし。池のおもには音なくて、おぼろおぼろのみながみは花園のわか葉にかくれぬ。

泉には、つめたき水ながれて、櫻のわか枝、梅の老木など臆せるさまに岸をはひたり。葉がくれに幽なるさゝやぎありて怒るが如く訴ふるが如きは花の神たちのむづかりならむ。さてはいたづらの夜の風やみにまぎれて接吻せしか。

よものけしきはなべてねむりぬ。そらもつちもあやしきいきにつつまれていと神さびたり。かしこみの心ゆくりなく起りぬ。誰れかこの幽玄を曉らむ。たれかこの崇高を仰がむ。幻はしろがねの光よりあらはれたり。物の音の調とゞのひたる如くあなたこなたの深みより生れぬ。あゝかうぐしき春の夜や、わが心うれしさに亂れむとす。

忽にしてよろづ蘇生りぬ。森も池も原もおしなべて生きたり。ウクラインの野邊に鶯なきぬ。玉を轉がす音の雷となりてひゞけば、月

はみそらの胸によりてこの美しきこゑをすひつゝ。
ながめやる遠里小野は、あやしき眠につゝまれて音なし。月かげをあびたる小屋のむれは、さながら浮彫をみる如く、暗とてりあひて眩むばかりなるは、そが壁なり。鶯はなきやみぬ。あたりはまた靜なり。信心の農夫は、はやねむりしころならむ。をちこちの窓に、なほあかしのもるゝは、小屋の戸口に遲なはりたる家族どもが夕げたうべつゝあるなんめり。

（ゴゴル）

露西亞の大野

さるほどに大野が綠のかひな、高き草はこの旅人の群をおほひて、黑き哥薩克帽の、はしのみ靑き葉かげに、みえがくれしつ。
父は、にはかに思ひつきたるやうに、兒等よ、なせにものいはぬぞ。弱法師とも見ゆる姿かな。棄てよ、悲しき物思を。きせるかみしめ、馬にひとあて、ガロップにてゆかむ。そら飛ぶ鳥もつゞかばつゞけ。
みたりの哥薩克は、鞍輪にかゝりて、高き草むらにうちいれ、毛皮の頭巾もみえずなれば、靡ける草の細路に、はやうまの蹄のあとのみぞ名殘なる。
日は既に久しく、朗らかなる空にあがりて、野邊に溫き光はみてり。旅人のむすぼゝれたる思もとけて、心おのづから鳥よりも輕し。
ゆき〳〵て大野はいよ〳〵えんなり。
今は新露西亞といひて、黑海の渚までひろごれるこれら南の國一帶は、そのころまだ、深綠の荒野にして、この蓬生のはてなき波には、鋤といふもの、入りしことなく草ふみしだく蹄のあとは、森の下陰ゆく如く沈みぬ。

世にこの大野ばかり美しきはなし。きはみなきおもて、さながら綠の海原とみるべく、花の錦の黃金の波をたゞよはせり。

細長き若草には藍花すみれ、そのほか、青き、紅き花草のいろを盡して、金雀花（たにし花）は、こがねの冠をあげ、白萩は傘のやうに花房かざして、いづちよりかこぼれけむ、麥の穗のところ〴〵うなだるゝも見ゆ。

この草ばなのかげにそひて、鷓鴣は頸のべてありき、もゝとりの聲そらにみち、たかきには鳶とむで、餌がくれの高草の茂みを目守り、遙けき湖のかたよりは、雁のつらなめてよばふ聲すなり。波のうねりのとびなして、野末かけいでたる鷗は、心地よげに、靑空の波をあびて、中天にかかり、斜にひろげたるはねの光、かの白き星のやうなり。

盡餉すとて旅人は、しばし、いこひぬ。從者（ナカ）は十人ばかりのこれも哥薩克なるが、燒酎もりたる小樽、馬より下して、かもうりの割りたるを盃

となせり。

麵包、鹹豚のほかに、乾菓子すこし、これに燒酎一盃を加ふ。父は人々の旅にて醉ふをゆるさず。

哥薩克はまた鞍にのぼりて、日落つるまで道をつゞけぬ。

夕ざれば、大野のたゝずまひ、とみにかはりぬ。入日はなやかに、千草の花の大野をてらして、荒れたる原にやう〴〵闇は落ちかゝりぬ。かげは靜に大野をおほひて、墨染の色をうつし、夕霧よもにたちこめて、おぼろ〴〵に、草も、花も、おのがじゝの香をはなち、大野は驚きこめたる衣のおもひあり。

さうびだちたる黃金の雲は、夕暗の空にたなびきて、大いなる繪筆もて、はきたらむ如く、透きとほりたる薄雲こゝかしこに、風は靜にこゝちよく棄末をわたりて、旅のあはれを慰むるに似たり。

ひるのまの響かつ消えて夜はことなる音に代りぬ。まだら色のをどりねずみは、穴よりいで、後足にのびあがり、しばらくにして野はその囁に充ちたり。こほろぎの歌もなりまさりぬ。時としては遠き野守の鐃より、白鳥の聲とよもして、白銀の鈴とかあやまたる。

旅人は野どまりの床をえらびぬ。

大いなる火おこして、からすむぎのあつものつくれば、炊烟斜に野邊の空にのぼれり。

食をはりて足しばりたる馬をかたへの樹にゆひつけ、あつき上衣のよるのものに露をしのぎてうち臥せば、星は眼をてらし草むらの虫は頭近くすだきぬ。もろ〳〵の聲は鋭きおとをなして、かさこそと羽音のさゝやぐも、おのづからこゝちよき物の音なるに、清き夜の空にのぼりて、うまいせる耳にいとゞ柔くきこえぬ。

眠れるものひとり、ふとめざめて、よもを眺むれば、野邊は、ひかり虫の、星とみまがふまで散りしけるを見たり。

しば〳〵、遠き野火のかぎろひは、空のところ〴〵に光りぬ。大野のたゞなか、あるは水のほとりに草の枯葉のもゆるなるらし。

しば〳〵白鳥のつらなめて、北斗の星に横はる見ゆ。しろみたる薔薇の曙にてりて、闇路にきゆるくれなゐの星かと疑はる。

事なくて、旅人はます〳〵深く大野をゆきぬ。荒れたれどなほえんなる、野邊の同じやうなる姿は、一樹の陰にだに破らるゝことなく、とほく〳〵ドニエペルのながるゝあたり、黒きは森のいろなるべし。

されどひとひ父は遠き草かげの一點を指しぬ。

みよ韃靼の馬かけるを。

頭小さく、髯長き韃靼人のかげは明になりぬ。ひしと、この旅群に眼

そゝぎて、獵犬の風かく如きふりし、やゝありて、こなたの十三人に近きを見さだめたるにや、若鹿のやうにとび去りぬ。

いざとく韃靼のあとおへやと父は早くも、のゝしりたれど、思ひなほして呼びとゞめぬ。否今は及ばじ、わが馬ディヤブルよりも彼の駒はやし。

思ひもかけぬであひなれば伏勢あらむをおそれて、父はさとくも警めたるなり。

かれは其小勢をドニエペルに落る小河の岸に導き、人々つゞけの合圖にて、まさきにのりいるれば、人も、馬も哥薩克は、そのかしらに從ひぬ。かくて流を下すことしばらく、今はあときえたりといふころ再び岸に上りてなほ進みゆきぬ。

その、ち三日、かれらは旅の終に近づきぬ。にはかに風のあたらしきはドニエペルの水遠からじと覺ゆ。

たちまちにして、めぢのかぎり、黑影のもと、大河の流るゝを見たり。

進みゆくなべに、長江の水とよみ、とよもし、わだつみの潮の聲にかよふ。河はます〳〵ひろごりて、みえのなかばをしめたり。これドニエペルが流つせを辭してその勢をほしいまゝにする處、中島のおしかへしたる水は堰とむる丘もなく、崖もなければ、思ふがまゝに岸ををかせり。

哥薩克は馬をおりて、わたりにつきぬ。ところ定めぬ防人の屬はこより三時ばかりなるコルティッツァの島に屯すといふ。（ゴゴル）

ニコライ・ゴゴル Nikolai Gogol は露西亞小說の祖也。新曆千八百九年三月三十一日プルトヴに生れ、千八百五十二年三月四日莫斯科に歿しぬ。「死したる心」「レ」

ソル」の大作に名聲を馳せ、南露の風光民情を描寫して前後比なき文藝の巨人と仰がる。上の二篇のうち、「露西亞大野」の章は傑作「タラス、ブルバ」の拔萃なり。千八百三十六年、故國を去て、羅馬に移り、久しく南歐の舊都に客たりしも、晩年を憂愁の病に暮しゝとぞ。

散文詩

田舍世界

六月をはりの日、このあたり一千エルスト、噫、故里、露西亞。

はてなき青色は滿天に漂り、その上に孤雲、泛ぶが如く消ゆるが如し。

日暖く靜にして……そよかぜぞ新乳のやうなる。

雲雀高きに名告り、野鳩くゝといふ。おともなく燕をちこちに飛び

かひ、馬の嘶、齒がみきこゆ。犬も今聲なく、靜に尾を掉りてまもりゐた

り。

折たく柴の烟、乾草のかをりに交り、樹脂のにほひ、けしきばかり、獸皮のそれも添ふ。麻の花、今をさかりに、重ぐるしき芳香放ちぬ。

深けれど、谷は斜なり。兩岸の楊樹、つらなめて、上に頭重く、下に幹さけたり。谷間には小川、水底のさゞれ石は、清流をすきてふるふ。かなた遙、天地の境、長江の青帶を横ふ。

谷のこなたに沿ひて、趣ある小舍、三つ四つ二つ。小さき倉の戸は閉ぢたり。對岸に、板葺の松小舍五六、軒毎に長棹たてゝ、鳩の家とす。入口には、髭短き鐵ものゝ馬を掲ぐ。あやしき玻璃の窓板は、虹のいろのたぐひを盡して、窓の戸には花瓶の圖、家毎の前なる小椅子も今樣めいて清げなり。盛だかの土の上なる樂寢の猫は、透きとほる左右の耳けざとくも從てつ。高き鴨居のあなた、裏部屋の涼しげなる陰もすきみ

ゆ。

われ今馬衣を廣げて谷のまきばに横ふ。刈りてほど經ぬ柴草よもに堆くして、香は人を壓するばかり。賢き農夫は伏屋の前に稻村つくりぬ。先づ日光に少し乾せて後、納屋に收むるなり。眠床としてめでたきものぞ。

稻村毎より、波うてる稚兒の髪のぞく。鶏冠ある家禽は、乾草ついばみて、甲虫、虹などをあさりゆけば、唇白き小狗は散りしく草のなかに轉びぬ。

ぬめごま色の髪もてるわかうどらは、外衣清げに、滑低く、重き靴穿ちて馬具はづしたる車に倚り、互に心にくきざれ言かはしつゝ、開いたる口の齒なみ白し。

まる顔のをとめ、窓より覗き、男の戯に笑ひ、稻村の稚兒たちを眺む。

腕太き他のわかき女は、井戸より濡れたる大釣瓶をくみあげたり……釣瓶ふるへ動きて、飛沫こぼれ光りぬ。

わが前に老婦たてり。縞の袴、新しく、靴もまた新し。淺黒き細頸にうつろ玉三列に卷き、白髪をつゝむ赤玉もやうの黄巾は、落ちかゝりて、その老眼を蓋ふ。

老眼なほ未だ欺待の笑を失はず。皺顔は笑み傾けり。おもふに七十を越えつらむ……しかもその春の色を忍ばしむ。

日にやけたる指を屈して、穴倉より汲みて間もなき冷乳の一盃を右手に支ふ。碗のまはり、乳滴れかゝりて眞珠一連とみるべし。左手をもてわれに温き麵包の大塊を捧ぐ。物言ふ如し、道ゆく人よ、來れ、これを食ひて心安かれと。

をりしも鶏歌ひいでゝ、せわしげに羽ばたきす。小舍に閉されたる

積の呻吟ものうげに答ふ。

あゝ、豊なる麥の貯よとわが馭者は叫びぬ。……嗚、露西亞田舍世界のたりほ、靜にもまた豊かなるよ。嗚何等の太平ぞ、幸福ぞ。

忽にして思ひ浮べぬ。コンスタンティノポリスなる聖ソフィヤ寺の圓閣に、十字のみしるし樹てむなど、都人の思ひわづらふもろ〳〵のよしなし事、はた何の益ぞと。

山靈

アルプス山の絶頂……戦々たる峭壁のつらね……高山のたゞなか。

山上に、澄みて音なき淺綠の空あり。霜烈し、むごし。雪かたし、光あり。雪をさきて、氷の峯、風の頂、怒るが如く聳ゆ。

大山ふたつ、地平のこなたにしてふたりの巨人なり。

ユングフラウの峯、フィンステラアルホルン山。

ユングフラウは隣山に問ふ。もの珍らしきことありや。われよりもひろく見給ふ君、雲の下に何かある。

この時、數千載は轉じぬ、たゞ一分なり。フィンステラアルホルンとよもし答ふ。地の上に雲霧……暫し待ち給へ。

數千載再びすぎぬ、たゞ一分のおもひ。

さて今はとユングフラウ迫る。

今ぞすべて明なる。天が下なべて同じ。水青く、森黑く、石たゞみ、灰色、そのうちに虫あり。こゝかしこ惑ひあるく。知り給ふらむ、君をもわれをもえ汚さゞる二足のものらよ

人間か。

然り、人なり。

數千載また轉ず、これ一分。

さて今こそとユングフラウは問ひぬ。

雷音にしてフィンスラアルホルンは答ふ、今虫の數少し。天が下すこし明るし。水はひきて、森も疎らと。數千載またゆきぬ、たゞ一分。

何をか見給ふとまたユングフラウのたづねなり。

われらの近くは澄みまさりゆけど、谷間はるかに班點殘りて、なにものか動ける如しと答ふ。

數千載また轉ず、卽ち一分の後、ユングフラウは問ふ、さて今は。

今こそすべてよけれ。なべて淸し、白し……いづこも、何處もわれらの雪、はてなき氷雪ぞ、なべては氷りぬ。今こそよけれ、靜なれ。

さらばよしとユングフラウうなづく。されどわが友、雜談に時はうつりぬ。眠るべき時ぞ。

まことや、その時なり。

かくて大山は眠りぬ。すみたる蒼空も永遠寂寞の境をかけて眠りぬ。

祈禱

人間の祈は、ねぎごとの何なるを問はず、すべて皆奇蹟を祈るなり。詮ずるに、なべての祈はかくの如し、大なる神よ、二二が四たること無からしめ給へ。

かゝる祈のみこそ人格ある者より人格ある者に對する眞の祈なれ。宇宙の靈に祈り、上天に祈り、カントの、ヘエゲルの、實體無形の神に祈らむとはあり得べきことにもあらず、また考ふる能はざることなり。

されど敢て問はむ、形あり命ある人格の神なりとも、二二が四たることと無からしめ得べきか。

然り得べしと信者は答へざるべからず、またみづから信ぜざる可からず。

されど理性が、人をして此不條理に反抗せしむる時はいかに。

この時大沙翁來り助く、曰く天地のあひだ外にくさ〳〵の事あり、嘘ホレイシオしかしか。

されど人々眞理の名によりてなほも駁し來らむには、かの高名の問を繰返すに如かず、曰く眞理とは何ぞ。

さればわれら盃をあげて樂まむ、而して祈禱せむ哉。

老嫗

孤り廣野をゆく。

そびらのかた、忽ち輕く愼ましげなる蹠音をきゝぬ。なにものか、わが後を歩めり。

顧れば、鈍色の襤褸をかつぎ、老いかゞまれる姥こそたてれ。顔のみぞ、きぬよりのぞく。皺寄り、鼻たかく、齒落ちて、黄めける顔なり。

たちよれば……おうなはとまりぬ。

誰ぞ、なにか求むる。乞丐の類か。施こふか。

姥、答なし。かゞみて、さし覗くに、半透明の膜か、皮か、鳥の眼のやうに、雙眼おほひぬ。おほひて眩ゆき光をよけたり。

おうなの膜、さはいへど、動くなし、開くなし。

かくてその肯なるを判ちぬ。

折返していふやう、施乞ふか、いかなれば、われをつけ來るぞと。されどまた答なく、たゞ少しなほかゞむのみ。

乃ち踵をめぐらして、わが道をゆく。

しかも、背に歩をきく。はた〳〵と、例の拍子、輕く忍びやかに。

また、かの嫗か、何故に添ひ來れると、心寂に訝りつゝ、もさて思ひ直すやう、途に迷へる婦女ならむ。人すむあたりへこそと、わが歩をつけくるなり。さなり〳〵。

しかすがに、怪しき不安の念、やう〳〵、添ひまさりきつ。おもへらく、こはわれにつゞくにあらで、われを導くなり。卽ち、右に、左に、指揮されて、知らず〳〵嫗に從ふかと。

遂になほ進み行きぬ。あなげうとし、遠のかた途の上、黑きひろきあるもの……竦めいたる……こちねんとしてわなゝく。嗚、おくつき。

然り、姥はそこにしも吾を追ふよ。

にはかに、ふりむく。姥、はた向ひぬ……しかも、雙眼あきらか、むごき邪念のつぶら眼……鷙鳥の眼……われ僂みて、顏に寄り、眼に近づく。

……再び例の半透明膜、れいの盲なる鈍きおもゝち……おもふ、われ、嗚、

嫗こそわが運命か、人の免るゝに由なき運命かな。

免るゝ由なし、活路なし。嗚、何のたはけぞ、試みなくて、已まむや……

乃ち他の方に走りゆく。

さて、走れども〳〵……さきの如く、輕歩はた〳〵と追り迫る……さきの如く、ゆくてに暗穴。兎の犬に追はるゝ如く、僂まりて、いづちに走るとも……露もつゆも變りなし。

思ひめぐらしぬ。待て、誑かしてみむ。こゝ動かじと、乃ち停る。

姥も二歩ばかりに、とまりぬ。音はきかねども、そのけはひす。

おもひきや、あなたの黑影、さながら、浮び來て、わが身につとそはむとは。

已ぬる哉。嗚。顧みれば……嫗ひしとみいり、齒もなき口元、苦笑にゆがみぬ。

免るゝよしなし。

犬

室内双影あり、犬とわれと。そともは、風雨すさまじく荒びぬ。

犬は面前に踞して、わが顔まもりぬ。

われ亦犬をまもる。

かれ、宛も、何事をか語らむとする如し。唖なり、言葉なし、はたおのれをも識らず……されどわれは彼を識れり。

われは識る。ふたりのきはに何の隔なしといふ思は、犬にも、われにも、この刹那にこそ浮ぶなれ。われら平等ぞ。同じ火花はふたりに燃えたり。

死は、冷たき長翼の一搖曳をもて、落し來らむ。

かくて寂滅。

その時、誰か、各に耀ける畑の、何たるを判ち知らむ。否、今目守り合ふこのふたりは、人間にあらず、畜生にあらず。

かたみに睨むその眼よ、平等のもの、眼なり。

畜生にも、人間にも、同じ命といふもの、おぢわなゝきつゝ、互に寄り添ふ。

わが敵

昔、人を識りぬ、これわが敵。業に、好に、心たえて合はず。過ふ度ごとに盡きせぬ論爭は起りぬ。すべてにつきて爭ひぬ。藝術、宗教、科學、地上の生、墓のあなたの生につきて、特に墓のあなたの生につきて。

信篤く情濃なる人なりき。ひと日、われにいふやう、君はすべてをあざみ笑ふなり。されどわれ若し先ちて死なば、必らず、他界より君のもとに音づれむ。……その時、嘲み笑はむか、いかにと。

言葉の如く、彼は先ちて歿しぬ。されど歳は移りて、その契、そのおび
やかしも、忘じ果てつ。
ひと夜、床にありて、いのねられず。げに眠は幾はざりけり。室はに
び色の、覺束なき薄明り、みいりつゝ、忽ち窓前に、わが仇のたてるを見る。
頭靜に振りてうなづくも、あはれや。
われ恐るゝことなかりき。愕きだにせず……
たゞ少し起き直りて、枕欹て、眦を決してゆくりなき幻をみる。終に
語を放ちて問ふ。君いま勝ち誇るか、悔い怨むか。こはなにぞ……
響か、咎か……あるは、君の誤てるを、あるは、わが誤てるを告げむとにや。
今受くるところ何物ぞ。地獄の責か、天堂の歡か。せめて、一言をだに
いへ。
されど、わが仇は、默して言はず。たゞさきの如く、うら悲しくも、伏眼

がちに、例のうなづく。
乃ち大笑すれば……かつ消えにけり。

物乞

街頭をゆく……老いさらぼへる物乞に、袖ひかれぬ。……眼、血走り、唇
蒼く、頬は爛れて、なり、むさぐろし。……あはれ、醜くも、貧窮の、此薄倖
兒に食み入りしよ。
赤くふぐだめる掌をあげて、かれはうめきぬ。救を口籠りぬ。
かくしの數々を探れども……紙入なく、時計なく、手巾だになし……
身に一物もつけざりけり。
……物乞の捧げたる手は弱げに顔へわなゝく。
鼻白みたるまゝ、其汚れたる手を執りて、懇ろに握りぬ。……怨む勿れ、
わが友、われ今一物なし。

血走る眼われを見つめぬ。蒼唇自らほゝゑみたり。彼も亦わが冷たき指を握りぬ。

口籠りて語るやう、心頻はし給ふな、わが友、これこそ忝なけれ、これもなほ賚ぞ、わが友よ。

この時われも亦賚うけたる心地ぞありし。

滿足

若き人、都大路を欣び躍りつゝゆく。歩も嬉しげに、眼に光、口にゑみ、揚々として瞼更に紅し。……心滿ち、望足り、樂これをこえじとみゆ。

何事ありて、かくは樂しき。遺産うけたるか、榮進したるか、そも戀のあひゞきか、あるは單に、すぐれたる朝げすまして、心地すこやかに、食足れる愉快、全身にみちたるか。嗚呼、波闌士王スタニスラス、この少年の頸に、君が美しき八稜十字の勳章かけたるにもあらざるべし。

あらず。かれは、その友を中傷して、醜聞を傳へぬ。賛めありきし心盡しの甲斐ありて、今其醜聞を、他の友の口より聞きしなり。……而も……かれ自らも之を信ずるに至りぬ。

嗚、何等の滿足、この溫和なる前途多望の青年、けふのこの日は、いかに懇ろなるべき。

處世法

いたく敵を窘め、またこれを害はむとまで思ひ込まばと狡猾なる老奸われに語るやう、おのれ自ら持てりと知れる缺點をもて、彼を誹るに如かず。大に憤りて……責むるに如かじ。

かくなさば、先づ、おのれに、さるかたの缺點なしと世に信せらるゝ利あり。

つぎには、汝の憤は佯ならずしてすむべし。……

即ちおのが良心の呵責を、他に移すことを得。
君にもし、首鼠両端の性あらば、敵を識りて汝、無主義なりと罵れ。
君、もし心から卑屈の人ならば、厳しく人を責めて、汝は盲従家なり……
……欧州文明の奴隷なり、社會主義の奴隷なりと告げよ。
非盲従論の奴隷ぞとも、いひ得可くやと、われ口挿めば、それもよからむと、くせもの點頭く。

戰はむ哉

いとも〳〵はかなき事の、時としては心機を轉ずるものかな。
悲觀にくれて、ひと日、大路を辿る。
憂愁の思に胸苦るし。心、沈鬱に亂れぬ。ふと仰げば……高楊二列のひま、途は、矢の如く遠きに馳す。そをこえて、その途こえて、十歩のあなた、眩ゆき盛夏の金光裡、ひとむれ雀、つれだちて、躍りゆく、勢猛に、をか

しげに、心だのみ強く、
殊に其群の一羽、必死の勢に横走りし、胸つきいで、謗りかに囀るさま、恐ろしきもの無しといふやうなり。げに勇しき小戰士かな。
時に、見よ、みそら高く鵰かけりて、おとし來らむず姿なるを。
これを觀じて、われほゝゑむ。躰をふるひて、憂愁消えたり。勇氣、豪膽、人生の愛、とみに、われ再び覺ゆ。
かれもわが上に飛べや、わが鵰。
われら戰はむ哉。かれなにものぞ。

（トゥルゲニエフ）

露西亞の作家、數はあれど、藝術の妙趣最も饒かなるはイヴン、トゥルゲニエフ Ivan Turgenief を勢でたりとす。「散文詩」は千八百八十二年の著にして、思想の奇拔なるを以て名あり。「遊獵日記」「大野のリア王」「獨」「親子」等の傑作、今に、十九世紀の珍品と稱せられて、作家の模範たり。

たとへ草

あけぼの

心樂しき少女のひと群は、踏歌して曙の祭をはじめぬ。歌ひ和していふ、いと美しく幸なる女神、さうびの姿、とこしなへに、若くあえかなる君よ。日毎に歡の泉、咲き匂ふ花にゆあみして、眼ざめ給ふかな」と。をりしもあれ、朝づく日さしのぼりて、駟馬の前にたゝせる曙の姿、あえかはげにあえかなれど、神のうちのいと幸なる君ならじ。涙まなこにみちぬ。地より曳きあぐる被衣の霞は輝く薔薇の顏の前に、雨帶ぶる浮雲のけはひなりけり。

「ほめ歌うたふ子らよ。汝等が若き命の清きにめで、かくは現身にこそあらはれたれ。われ美しとは、汝等の知るところ、われ幸ありやな

しやは、ばらから花の神の胸に濺ぐなる日毎の涙にてもはかりうべし。盧淺くも若き世のつま選に、老いたるティトオヌスに過ひてより、つとめて毎に、その腕よりかくは起きいづ。そが咎によりて、年少ほろびぬる白髮の不死は、わがせに落ち、われも、ともぶしのかぎりは、光と美とを飲かむ。されば、かげを追ふわが短きつとめを急ぎて、日ねもすは、日の神の光のうちに隱るゝよすがあれど、再びわがせに見ゆるや、涙はふり落ち、羞に赧みて、古りにたるわれらの床にこそ潜むなれ。このためし想へ、をとめら。汝等のうち、いと美しきものも、かねて心賢くも、同じきはなるつまえらびせざらむには、幸の頂へはえのぼらじかし。」

曙はきえうせぬ。されどその影は露の涙にうつりて、をとめらにあらはれたり。その後、子らは女神のいと幸なる君と讃せず、この敎によりて、賢くなりぬ。

眠

惱多かる人の世の短きひまを慰めむとて、ユピテルの造り給ひし數しらぬ精のうちに暗き「眠」の神ありけり。自ら顧みていふやう、「光にほふ樂しげのはらからのこたちに交らひて、われはいかゞすべき。「戯」に、「悅」に、「愛」のすさびの群に入りて、わがおもちのいかにうら悲しきや。願くは、不幸の人に望まれて、その憂の重荷を放ち、柔かき忘却の盃すゝめなむ。願くは勞れたる者に親みて、惱ましき新なる樂にいそしまし めむ。されど倦まざるもの、愛の惱しらぬもの、われはたゞ、その、悅のひろごりをかざるのみ。」

人間と精との父はいひ給ひぬ。「誤てる哉、暗き姿のなれこそは、世にすぐれたる樂しき精なれ。「戯」も「悅」もつひに倦ずるを知らずや。その人を倦ましむることは「悲」「憂」よりも早く、又「幸」に飽きたる人は徒然のを

こたりに惱まむ。」

また曰く「汝みづからも、また歡なくてをはらじ。げに、はらからの群聚もなれに樂み及ばざらむ」と。らうたき「夢」の蟻銀のつの笛たまひていふ「これより「眠」の種ふりいでよ、さらば幸も不幸も、ひとしく汝がはらからを措きて、汝を望み汝を愛さむ。このうちなる「望」「戯」「悅」は、なが妹グラチエンの不思議の手にて、われらが「歡樂」の流に汲みたるものぞ。又そが上の澎氣の露は、汝の福せむとするものを、「願」といふおもひに樂ましめむ。愛の女神もまたこれに不朽の靈液をさへ注ぎたれば、うつし世の實よりも、その樂いみじかるべし。咲きにほふ「戯」「悅」のむれをさかりて、人は汝の腕に縋り、歌人もなれを歌ひつゝ、なが妙力に臨がれつ、心の清きをとめさへ、甚ひ求めて、やさしき幸の神と仰がむ。」

こゝに眠の恨は勝ち誇る謝恩にかはりて、グラチエンのいと美しき

バシラアはその妻となりぬ。

班鳩のはじめ

戀人ふたり、その思のはじめの幸多き夢に添ひゐたり。あはれ、惜しや、この思、つひに夢にて終らむ。慈悲なき運命（さだめ）の神は物妬みして絲を絶ちぬ。ふたりの魂は一のくちづけ、ひとつの吐息に交りて世を去りぬ。

胎を離れて、ふたりの始て見しは、間近に浮び給へる愛の女神なりけり。されば、悲しげに怨ずらく、「君よ、われらをぞ護りたまはざりし。われらの思を知り給ひながら、人の世にありて、願かなはせ給はざりけるよ。されど今、この影となりて、かくは放れじ。」

女神心動きていふやう、「影の戀は、かなしき戀ぞ。今にして、人間の命與へむことは、まことわが力にも及ばねど、わがしろす國のものに、汝等

を易ふること、「運命」に許されたり。いで、華やかなる歌聲さゞめき合ふわが車引の鳩ともなりて、「媚」「戯」の群に加はり、靈液のかてに生くべきか。汝等の操汝等の愛、この賞に當れり。」

すなはち、一「聲に和していふ、「ゆるさせ給へ、あはれ心寛き女神よ、この榮あれど危き賞を。「戯」「媚」の群に加はり、君が位高き大宮のとこしへなる光さゞめきの裡にして、誰れかは、われらの操と愛とを守らむ。鳩とならば、ある寂しき里に送られて、伏屋の巣に籠り、かたみを世として暮さむものを。」

女神すなはち變形の命を下しぬ。見よ、班鳩のはじめの番（つがい）を。神をめぐりて、謝恩の後、元のおくつきどころにかへりて、樂足らざりし現世に歸らむと願ひつゝ、老いたるさだめの神をも動かさむず鳴音のふしもあはれなり。げに聲合せたるその歌こそ慰のよすがよ。野邊にし

てかく樂める眞心の愛はエヌス高御座、凡べての「戯」「悅」にも、遊たちまされり、

かくて、いつまでも、ふたりを鳩の姿にあらしめ、流轉定なき人の世の危き移り氣より護る「運命」の心、妬かそも愛か。

（ヘルデル）

ヨハン、ゴットフリイド、ヘルデル Johann Gottfried Herder は千七百四十四年八月二十五日東普魯士モオルンゲンに生れ千八百三年十二月十八日に歿したる前々世紀の文豪なれば近歐の作家中に數へ難けれど、この學殖ありて、創作の詩才を兼れたる有德の儒はヴイマルに集ひし獨逸文學の精粹のうちにも、雅馴の姿殊にゆかしき名家なれば、千七百九十二年九十七年の交、ゴオタに上梓したる「寓言集」の二三を和げて、詩人、評家、史家、神學者、言語學者其他くさ〳〵の學才ありし此大人を忍ばむとす。

孤島

一

この荒濱の無人島に、われを棄殘したる捕鯨船は、南の方、わが眺より消えなむとす。されば、われ今孤、一千里内隻影なし。

われは、一人の女を戀ひぬ。嫉妬の鬼はわが心に潜きぬ。われは鞘當の人を決鬪に殺しぬ。彼は皇族なりき。

かくて、露西亞政府は、この島に一年を送るべう、吾を定めたり。即ち吾を死刑に定めぬ。

噫いなれば成敗人の斧に付さゞる。いかなれば餓に、悲に、絶望に、われを殺さむと計れる。いかなれば吾を强ひて、恐しき北極の熊と命、爭はしむる。わが犯たゞひとつなるを。

スピッツベルゲン。人間のいかなる種も住み難き恐しき北極の濱にわれはあり。北緯七十七度。極を距る二百六十里。

罪定めし人々の言葉と覺ゆ。これは東北島と呼びておそろしの群島の南端に位し、氣候最も溫和なりと。むごかる情かな……わが苦悶、長うするのみ。

捕鯨の根據として、露西亞が定めたるは、この永遠の氷野のうち、いづれのあたりともわかねど、たゞ知れり、ふたつきの前、八月末つかた、移民皆ラプランドに渡り、春ならで歸らざるを。即ち二百四十余日。

されば われ孤にして、家なく、隱家なく、食なく、友なし。

死は……一定にして程遠らぬ運命ぞ。

けふは十月十七日。寒氣北より迫りぬ。數日にして凍死避く可からず。

兎角して、吾は獵に食求めむ。むごきやからも流石に銃は殘しおきぬ。……わが自ら殺さむと思はむを計りてか。馴鹿を殺して食とし、氷を啜りて食料とし、これらの岩に、身隱の洞を求めむ。英人ペリイは北緯七十三度、北氷の雪小舍に命支へき。

眞なりや、されどわれ今極に近きなほ四度、しかも身溫むるに火なし。死こそ死こそ、避け難き運命なれ。

二

六日既に過ぎぬ。

望の光まのあたりにひらめきぬ。

魯敏孫の如く、杉の二枝を擦りて火を得たり。

きのふ巨巖のたゞなかにさむさよけたる深洞を見いだしぬ。

日毎に五六の馴鹿を殺し、之を寸斷して、肉を氷山に蓄ふ。

かくて一年は完からむ。

また燃料を蓄ふ。斧はなけれども、極寒、代て柮の業すなり。樹木數株、夜毎に裂け散るを、朝な〳〵洞のうちに運び入れて、わが火を養ふ。

蓋し死のわれに來らむまで。

さては冬とおろかしき事もすなり。吾は生きて人間の世に歸らむと欲す。寂寥われを怯にせり。われは生きむと欲す。

三

酷寒堪へがたし。

今はこの岩陰の洞に隱れざる可からず……牡蠣のその殼に隱るゝ如く。

終にはおくつきともならむ此洞に自ら埋むるに先ち、この石縫を縫ふに先ち、われは世界に、自然に、光明に、生命に告別せむと欲す。

日は地平に近く動きて、出沒の間、其墳塋を眼にし、宛も塚の上の光ある幽鬼なりけり。

蒼白の斜陽、海面かけて悲愁きはみなき光なげたり。

水は凍りそめぬ。やがては霜の鎖に結はれむ。

空の穹窿はもの暗き紫帶びたる綠にして、いつもよりは地に遠ざかり見ゆ。

この凍りたる空に、せめて開たる悲しげの花も、北風の息に萎み、河水流れながら、晶玉の鎖に結れぬ。見よ今は猛なる瀧津瀨も凍り閉ぢて、悲壯の態度したる勇士の如く、寂たり動なし。おくつきの靜寂は、雙音破れざる靜寂は、あたりを蓋ひぬ。鳥の歌も、河の低語(ささやき)も、風の吐息も、葉のそよぎも聲なし。

動なく音なし。都て空なり。無有の寂……たゞこれのみ。永劫無

極とはこれら單調なる寂寥に類し、これら不動、死滅の荒野に通ふか。
血潮の溫、心臟の鼓、呼吸、足音のみぞ自然の與ふる生命の徵なる。
宛もこれ死の世界、天啓後日の星、終の審判の後の地球なり。

* * * * * * * * *

日わづかに十六分。
あすは日も昇らざらむ。
あすよりぞ、われは六月の冬籠し、日は三月の冬籠せむ。
あはれ日よ、いつか歸り來て遇はむとやすらむ。

* * * * * * * * *

烈しき寒かな。
大氣の濕、氷の針となりて、わが面を刺しぬ。
氣息は狹霧なしてわれを繞みたるまゝ、重き大氣をのぼる能はず。

銃の煙亦横ざまに、擴りぬ。
きのふ蔽なき手にて銃機に觸れたるに、指は鋼鐵につきて、引放たむとする時、皮殘りぬ。
めぢのかぎり、われを圍める白砂の上の發光は、いたましき眼の炫衝を起せり。
敗血やがて來らむ。
噫萬象の死の最中、生を支へむとする爭の、いかに難きや。

四

きのふ日は東にあらずして、南に現はれぬ。
遠き地平に微けき半圓を畫き、十五分ばかりに沒りぬ。
けふは十一月七日なり。……スピッツベルゲンには恐しき日ぞ。日の見ゆる終の日なり。

午前十一時半。

過ぎし三時の間、微けき薄光は、遠き地平のあなたを照しぬ。

されど日は見えず。

果せるかな。見よ蒼白の光悲しげに、地平に現はれむと爭ふ日影を。

されど、輪影終に出でず。

過ぎゆくなべに繰すこしばかり、水天の域をかすりぬ。

過ぐること一分、終に消えたり。

とこしへにさらば。光の泉、天の冠、この世の命よ。

さらば、わが終の友、さらば。またも歸り來ませ。

五

日沒りて幾日か經つる。

知らず。

わが時計は一週のほど動きたる後、酷寒これを麻痺せり、あらず、殺し。ぬ。

極寒すべてを殺すなり。

されば、けふ何日なるを知らず。

されど今、日といふ言葉に何の意かある。

日はわれにとりて存在なし。

刻を記るすものわが世になし。

過去、現在、當來は、わが心に恐しき一群を爲しぬ。

刹那の一連續……これこそおくつきの壁の内の時なれ。

死者もし暗穴道にして繞圍を知る力あらば、わが苦める處かれらも

苦むならむ。

浮世幾代の世紀、こゝの數秒よりも早し。

スピッツベルゲンの一冬は陰府の永劫の姿を浮ぶ。

理性の界を越えたる想は、わが無有の荒野にひろがり、終にわれを棄て、去る時、物狂になし終んぬ可し。

われは絶る可き板子もなくて、否定の海に難破せし舟人の如く、現し世の觀念も夢心地なり。われとわが存在を疑ふ絶念は、無神者のそれよりも望なし。彼等はたゞ當來のあるを否めど、われは現在の存するを否めり。われは失ひぬ望のみか、現を。

六

人間を去る幾千里ぞ、世に忘せられたるいかばかり。

いづち、心はせ向ふとも、世は里の幾百を距てつ。

西め方一千五百哩、兩の世界を結びて、グリインランド横ふ。

北の方……極あるのみ。

大西洋南のかたに漂ふ。かしこ、とこしへの春の歐羅巴ひろごり、かなた照日の阿弗利加州、あなた南極一帶、今は夏の歡に耽らむ。

東の方、二千四百余哩、ノヴ、ゼムブラあり。

噫、わが悲運の現に似たるおそろしの夢を人間の想に與ふる夢魔あり。

七

大洋洲の毒樹ウパスは其陰に本草おかじ。

アディラの馬蹄一たび印する處、綠草再び生せず。

物妬の人には他人の幸福によりて、この世くらし。

自愛の人はおのが小天地をかこめるよりもひろき大氣なきが爲、絶間なき假死のさまに日暮しす。

懐疑家は否定の境遇に生く。

かくて吾は……吾はなにぞ。なにを吾はするぞ。いかゞして吾は存するか。

八

今が今、心樂しき群集をいる、燦爛たる宴の席いくばくぞ。

舞踏……戀……音樂。

われは……永滅。

薫き込めたる室、かゞやく爐の火、華麗、樂椅子、皮毛、珈琲、糖酒、煙草、……あはれしる物語、歡樂の休息、歡樂促す刺戟、光柔き房、驕樂の臥榻、樂につゞく眠、嗔、アレクサンドラ、

こはそも如何、……われ聖彼得堡にあり。五月ひるすぎ、香よき花園に日かげ浴びつゝ、もろびとわれらをかこみて笑ひさゞめきたり。人人ゐやす。アレクサンドラ、わがアレクサンドラよ。

これもまた夢か。

嗔、たへがたきとこしへの夜や。

朝は、いつ來らむ。

九

永遠また頭上に轉じぬ。

時のおほかたは眠り暮しつ。

一歳既に過ぎしか、はた、一月のみか。

時はまことより、想像に長きか。あるは知らぬまに過ぎ去りて、かくも短くおもひなさるゝか。

わが日々並はいづれに誤れる。望のかたにか、怨のかたにか。

嗔、ときしるす時計なく、晝夜なく、日月も、星も、なくて、吾ひとりには計なきこの時とは何物ぞ。濛鴻なり。

こゝに一の生物なし……わが薄倖の靈のみぞ、永遠なる無有のたゞなかにして。

をりふしは手を心にあつ。かくてをり〳〵に算へたる脈搏の數は、總額百萬を超ゆ。

脈搏一百萬秒數一百萬、十一日半。

樂しき人の世の日は鳥の空飛ぶ如く、記憶の上に痕なくて過ぎゆくなり。

夕暮の黄昏、いくそたび、わが戀ふる人の傍に、われを見しぞ。夜は來てまたゆきぬ。曙ぞくなる……かくてかうやうの長々し日もたゞひと晩なる心地す。

噫、懊惱の一分に幾世の長さか保れたる。

樂しき幾代もげに束の間なりけり。

十

頭上の岩は碎けぬ。

この島一千の碎片に破れむとするか、

非分の暴風に疑あらじ。

即ち三月なかば過ぎて、日は地平線上に照すか。

そともに出でむ。空みまほしや、日かげ仰がばや。

* * * * * * * * *

されど何の音ぞ。

饑に狂ひたる北極の熊の吼りなり。なほよし、戰はむかな。

われ亦熱血に饑ゆ。殺かばぬへむ肉をこそ思へ。

銃を提げ、洞の口なる氷をのけて、戸外にあらはる。

人ありて見たらむには、これら永遠の雪のものなかに、わが姿のいか

に奇しげなりけむ。床より出づる猛獣の如く、冥夜を脱けたる巨怪の如く、おくつきに蘇生れるラザロに似たり。

十一

うれたくも誑れけり。

今ぞ春邊、日仰がむ、四五月すぎぬと思ひきや、けふまだ冬ぞ、まだ夜ぞ。

星宿の位よりしてまだ一月なり。

苦未だ半ならずして忍既に盡きぬ。いかゞせむ。

暗拱そら高く月は照しぬ。

造化に忘られし世を訪はむとて他界の白鳩飛び來りし如し。

すさまじき夜のさまや。

いづれに眼轉するも、たゞ涯なき荒野のみ。極なき寂寥のみ。

海は凍り、雪積りて陸とけぢめあるなし。

元行亂れ合ひて、わが不動の時の姿に似たり。

萬物、處をかへ、形をかへ、色をかへたり。

谷は雪に滿ちて山頂と並びぬ。

樹木は晶玉の鐘なり。

なべて、音なく、白く、つめたく、ゆるぎなし。

物狂ほしの單調かな。

月は雪のきらめきに映りて、天いとくらし。

星は微かに程遠くして、別天のものとおもほゆ。

* * * * * * * * * *

萬象何の故に忽ち暗き。

星は何故にならはぬ光放つか。

こはいかに。

光明の海、月より流れ、自然を包む白樓は熾光を映じ、遠きめぢの界い
やとほざかりゆくよ。
かくて暗黑はいよ、くろみゆきぬ。
なにもの、秘事、自然に行はる、か。
嗚、北極紅（アウロラボレアリス）
北天、幾千の光明（ひかり）に輝き、幾千の色彩（いろ）に榮えたり。紅炎金雲、宇宙に洽く、寂寥燃えあがりて、氷山に虹霓の色あり。垂氷は黃玉の柱、石牀みな青玉、既にして傾影つんざけ、光の海は現はれぬ。其時想像の眼もて、われは北極のいたく輝けるを見たり……人間の足跡いつまでも屐まざらむ寂寥の野をかいま見たり。終なきおそろしの其地にこそ、あやしき地軸の横ふさへ見ゆれ。

崇高きはみなきこの劇をわれは孤して見るか。物とはなしに跪き

ぬ。
こ、、地球の涯は光華ある殿堂に變じぬ。溶けたる黃金の聖宇（みや）、秘密の廟（たま）なり。
この偉大なる煌光の上にして縹緲たる火柱、天光の穹窿、流旗の天蓋聳ゆ。空想逞うすれば稻妻の搖籃（ゆりかご）、光明の泉、日のかゞやける臥榻（ねいす）か。
そらのうち何等の生命ぞ、熱ぞ、美ぞ。かくも長く色彩生命の衰弱をのみ見たる眼には何等の火ぞ、色ぞ。

* * * * * * * * *

漸にして、沸きかへる光明の流は、集りて一千の太陽を作り、祭の終の燈の如く、續て消えうする幾萬の燐火を爲しぬ。虹の色も消ゆ。猩紅も黃みぬ。紅藍も紫に染みぬ。再び暗黑荒廢の世なり。
流光終にほろびけり。

十二

己れ再び墳墓にあり。

靈も肉も再び不動極寒と爭ふ。

不動なるかな。火の前に蹲りて、かぎりなき時を過しぬ。

わが眼、光を飲み、わが心、火の波に浴す。この火なかりせば、わが血流れじ。不動酷寒はおなじ一の物なり。

かくて時は過ぐるよ。

さてわが心、瑣事にいそがし。あるは灰の原子と火の原子とのさゝやけき關係をおもひ、あるは意おもひのまゝに流れて、宇内を一瞥す。

年少と年少の客氣と半生の閲歴おもかげにして見ゆ。

もし終に此地去るを得ば、宛も再生の人の如くならむ。極寒不動は、わがきしかたの名殘より、新生を作りぬ。いたり深くすさまじき幾多

の思、幾多悽愴の懐疑、われはこの牢獄より携へ出でむ。

寂寥は、おそろしくもわが心、廣げたり。

遙に世と人とを思へば、正確の配合、各物の精密なる關係、いよ〳〵明なり。

幾多の瑣事は價なくなりぬ。世にありしときは、こよなく大事がりし瑣事なりしを。

噫もしわれ、世に出でなば、高潔の行して、偏見の帕(かしらぬ)をわれと幸福との間に來らしむるなく、習俗の網にわれを閉づるなからむ。絶望われを不仁(じみ)身になしぬ。

わが心と世との間には既に何等のほだしなし。氷はとこしへにふたりをわかちぬ。

われはわれなり。世は一の單位、われは他の單位。

きのふ、世は、われを其胸より放ちし如く、あす、われは驕慢のおもみもて之を碎かむ。

わが氏卑かりき。われは人間の同胞に位を求めき。われは同胞の愛をわかち取らむとて、個人の性を棄てたり。さてわが思と人間の無情とはわれを冷ならしむ。決死の戰せむかな。われひとりにして、世の敵たるに足らむ。

極寒わが體を冷ならしめし如く心をも冷しぬ。

十三

不動の永刧また過ぎぬ。われとわが存在も覺えねば、一日なりしか、一年なりしかを辯せざりき。かくて再び洞より現はれぬ。

身に泌む寒さ堪へがたし。

嗚、いかに恐ろしの疑惑、われを苦むるよ。

か、る思浮び出でぬ。深雪またとふりつみ、二千二百時も長きなほ一夜や始りけむと。

嗚、思ふだに心凍り、靈冷えぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

洞を棄てたり。

まだ夜なり。

巨大の疑問よ、今みる夜は何の夜ぞ。

わが罪の一冬は過ぎしか。またの夜は始りしか。けふ何の年ぞ。

十四

嗚呼歡ばし。南の地平さうびの色に紅みぬ。

北極紅のてらしかとばかりなり。

されどこれはあだなる北極紅ならで、まことのアウロラぞ。てるは

日の曙なり。

赤道の風、太洋の霧を赤くす。

曙のはじめのいたはりをうけて、よもの雪ゑみそむ。

星は紫のそらに消ゆ。

月は北天にかくれぬ。

曙破るゝよ。

あはれ、曙のさうびの光。

あはれ、待ちこがれし遊樂の日や。この荒濱をよろこばし來るか。

あはれ、日の君の金額に流るゝ濡髮よ。

日はあけたり。

かうやうにして、創造の朝は明けそめけむ。

かうやうにして、創造は濛鴻のやみより、あらはれけむ。

かうやうにして、橄欖のみづ枝くわへたる鳩の、ノエの大船にもどりし時、新生は人間にはじまりけむ。

けふ、われは無有の空より、こゝらの月、わが送りたる名も無き否定の空よりめざめぬ。

けふ、わが心昏睡をふるひ、光明は夜と雪との單調を破りぬ。

けふしもわれ命に歸りぬ。東に紅き朝の光は、樂しき日を約す虹霓なり。

けふしも、すなはち、生命の好望はわが心によみがへりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

曙はひとゝきつゞきぬ。

日は地平を上らむとするやうに覺えし時もありけり。

天を蓋へる霧の帕もわかれむとす。

なべては消えうせてけり。
すなはち時を同うして、朝夕の黄昏を見しなり。 榮多かるながめかな。 わがおもひ、奮心歡樂に溢る。
けふは二月四日なるべし。

十五

二月五日。
曙のつゞきけふは一時半。
峯の頂、しばし日の光をてりかへせり。
あすこそ日を見め。

十六

日よ、日よ。
終にして君はまのあたり照らせり。 聖なる星よ、光明生命の泉よ。

けふしも、スピッベルゲンに臨み給ふこの束の間のとぶらひに、わが心の樂いかばかりぞ。
をりかへし〳〵幸なる哉、光を冠り、金を被く森羅の君よ。 その近づくは曙の笑に名のられ、その去るや、夕風の吐息に伴はる。
星は君の光ある從者ならずして何ぞ。 數知らぬ天軍、ゆきすぐるまで夜一夜の間はあり。

十七

なほ三月はすぎぬ。 望によりて月短し。
春よ。 香と調との女神は、既に天地海空を歡ばしけり。 なべては生き、なべては動き、なべてぞ歡ぶ。
日今北方に沒せり。 一時ばかりにしてまた出でむ。 五月五日とおもふあさてよりぞ、三月はつゞく日始り、グリインランド人いくたりか、

この海に來て人の住む地にわれを伴はむ。

今しも五種の閃光は地を照しぬ。……夕の黄昏、曙の光、消えゆく北極紅の燦爛、南より來る月代の微影、遠き星のふるへる光なり。

プリンクといふ雪明もこれらの光と交りて凄愴の色を自然のおもてに投げたり。

十八

こゝら高度の地に於ける自然美の凡べては萬象をおほひぬ。

海は氷の縛を被り、綠波遠白くひかりぬ。

勢加はれる微風の聲さへも、この永遠の不動には徒然慰むるひゞきあり。

北よりはあやしきとゞろきぞ迫るなる。

冬が作れる晶玉の城もくづれかゝりぬ。

流るゝ島あまた極より泛びて、わが眼前に列なれり。この地の恐に生ふる幻影か、はた、動るげる連山か。

あすは北極帶の微風にとけむ氷山なりけり。

かくて陸の上、なべてはゑみ、さゝやぎ、歌ひ、咲きおふ。

植物は現はれぬ。野は草木に、岡邊は灌木におほはれ、雪のふところよりは、黄なる苺の葉もおひにけり。

數知らぬ瀧川は雪解に養はれ、音高き歡をもて走り跳り飛びめぐりつゝ、淙々の美音を空に滿しぬ。

白罌粟と黄金の葱は、泡だつ水に媚めかしき頭よせて驕樂の水精に似たりけり。

松杉は黑き葉に蓋はる。

麓は地衣の花形つけたり。

ところとして、變化、色彩、活動ならざるはなし。

島は歌ひ、海はさゝやき、風は戰ぎぬ。……趣多かる合奏かな。

邑長めいたる北極の鷲は遠長くなきぬ。

マレマク鳥は柔きうまし音に震なきぬ。

ロトゲル鳥もうらがなしき長鳴して、班鳩の聲に似たり。

黄金の彩羽の雪鳥は、道はなれさすらふる星の如く、中天を飛びめぐりぬ。

驚かれぬる變化かな、榮多かる蘇生よ。

かくて、さはいへど、この春に比べては、蘇格蘭最寒の冬も温和なるべし。

十九

青空の澄きに、大海の涯にして、かの黒影はなにものぞ。

わが心堪へがたく烈くも打つよ。誑れたるか。

感謝す、わが神、捕鯨の船なりけり。

この方向に進み來りぬ。

疑もなくヘンロオペンの瀬戸さすならむ。この島影の四町ばかりを過ぐ可し。

銃をもて合圖すべし……

噫、救はれたり。

＊　＊　＊

已ぬる哉。

寒氣は銃の裝置を破りぬ。合圖爲し難し。噫、船は見ゆ。一哩をこえじ。グリインランド船なり。

救け船、救け船。

噫、呼ぶ能はず。わが聲枯れたり。弱り果たり。

救け船。

この聲とゞかざるか。

噫、かくまでも人近く、しかも救はれざるとは。

港見ゆるあたりに着しながら、陸に達せずして空く死なむとは。

プロメティウスの如く、岩に鎖がれて死なむとは。

殉難の一年を經て、埋葬の十閲月にして死なむとは。望今絶えたり。

彼等既にヘンロオペンの岬をめぐりぬ。

消えにけり、噫、消えにけり。

甚しき運命の惡戯よ。

望などに誑かれしわが愚さよ、おろかしくもわれは……噫、かゝるさまにして、わが眺より消ゆる勿れ。わが神、わが神。

こはいかに、

わが苦悶を嗤ふ殘忍の運命にまたもたよるべきか。

いな、

心決しぬ。

自ら死なむ。

生きながら、おくつきにせられて、またの冬を過さむよりもすぐれたり。

おくつきは死人のものぞ。

二十

大エスペレル號にして。

八月八日。

家路の旅なり。

スピッツベルゲンの終の巻は、まさにわが眼よりかくれむとす。
もれを救ひし船はさきにヘンロオペンの瀬戸さして消えたりしそれなりけり。
自ら手を下したる傷に惱みて朱に染みたるおのれを東南島の他の入江に泊てたる大エスペレル號の乗組は地上に見いだして、命たすけぬ。
スピッツベルゲン*に來りしとき、まさに十九、こゝに止ること十閏月なりき。而も船人は吾が髪の白く、額の皺ばみ、眼鈍くうれたきを見て三十五より四十路までとこそ思ひしか。

（アラルコン）

西班牙驍林院學士ドン、ペドロ、アントニオ、アラルコン Don Pedro Antonio Alarcon は千八百三十三年三月十日グアディスに生れ、九十一年七月二十日マドリッドに歿せり。五十九年軍事通信者として、モロッコの戰役に從ひ、六十四年カディス選出の議員となり、六十八年革命派に投じてアルコレアの役に戰ひぬ。かゝる閲歴の

結果は天資の文才により彩多き熱情の辭をなし、「亞非利加從軍日記」Diario de un testigo de la guerra de Africa（一八五九）「詩集」Poesias serias y humoristicas（一八七〇）「三角帽」El Sombrero de tres picos（一八七四）「蕩子」El Hijo Prodigo（一八八七）等の作あり。

四季賦

春

古の暦數家は、歳を霜枯のをりに起し、むつき雪多かるみぎはより月なみの流に、人をおくり放てど、われは春より春へと年を數へ、冬枯よりも、咲花にかゞなぶるのすぐれて樂しきを思ふなり。

ボルジニイの美しき物語に、ベルナルダン、ド、サン、ピエルは、椰子の花、芭蕉の果をむすめの身のおひたちのしるしとなしぬ。これに比べては冷たき北國の暦、いかに情なく歡薄きや。こゝらの年月、湖の氷、森の落葉みしいくたびぞ。

まことに、春のめぐみ、咲花は、月なみのはじめにふさひて、今ぞ萬象いとはやくひろがり、血いと溫かく、おひたちのいとたやすき時なる。春

べには百鳥歌ひ和して……うなゐの口禁るやうに、をがは水まして……年少の心溢るゝ如く、細雨なに心なく落ちて……わかき涙の流るゝに似たり、大空の定めなきも、わらはごの心に通ひぬ。

涙こぼれ、笑あふれ、歳はうなゐの如く生氣の熱を得。暦數の人いかがいふとも、舊年の名殘は、春の裾にたゆたひ、卯月遲ばな、その墳塋に映映しき棺布と散りしき、青鳥の經よむに至りて、終に消えぬ。

陽氣の生動は、冬の雪の消ゆると、ともにして、ふるとしの枯葉に、うらわか草の萌出で、わが心、造化の惠に近づけるやうおもほゆ。

春の歩の一足づゝを、あとづくるこそをかしけれ。殘の冬の氷の壁を、長雨の穿つさへあはれなるに、丘の上の雪はとけ、山川の瀬早く、澤水は氷の蠟布かいやりて、碎けしを大海の原に下しぬ。

やう〳〵雪げして、草より縮む水際の白妙も汚れ、わらやの軒の玉水

おとなふほど、われ南の築土にそひたる麗けき片岡求むるに、こゝは日影てりかへして大地に二重のつとめ行ひ、あえかなる翁草楊梅のかすけきにほひ三月の風まだ冷なれど、おくつきの野にして天の望仰ぐ如く心ときめきぬ。やゝありて、柔かに、霞める日は來り、冬のみのりの哇も、落葉の森かげに青みて、氷も既に骨のみなる雪解の名殘、北山の片岡に、とく〳〵と消ゆなむとす。

かくて門邊の草も新麥の色となり、紫草つのぐみわたるほどに、もゝは築土にさき、梅は白妙の梗榕(むばたまの)つけ、色よき韮切の烏は楓に釣床かけむとて、糸ついばみ、雀は番(つがひ)にて囀り歌へば、楡の老木も、蕊いろの花散らして、しもとの末を綠にし、常に竿たれ鱸おとす前の小河には、楓の紅花ぞ浮ぶなる。さるほどに、樫もしとやかなる綠の鈍たる房もて春のかゞりるの舞に加はり、やをらつやけき、長葉となれば、女貞(みつば)、森際にひろき白

幕はり、蒲公英、丘の上にそひては紺青の空の星の如く、よもの雛の野櫻は神より外に、はぐゝみなければ、心うれしげに、ふるへたる白指天にささげたり。

かゝるなかに、春の膏雨は來れり。わらは子の愛は、涙にうるほひて長ずる如く、年も細雨に綻びぬ。されど卯月のそら、雲、心おぢてうかべり……清心に陰おつる如し。細雨蕭にうるはしうおとし來て、……をり〳〵の日かげ、その滴をてらせば、そのかずのうれし涙なりけり。

冬の雨は冷くて、まもりにくき時雨なれど卯の花くだし愼ぶかく、なかば恥らふやうに、しかも愛ぐるしきは。……聖壇にすゝむ新妻の歩の如し。

めぢの界鈍色おもぐるしき冬のあらし雲ならで、是は、ものとはなしに、知らず、知らず、天頂に忍びよるも、老の迫るに似たりや。されど人も

し四月の日の快き勢に倦じて、天仰きつゝ、横ふや、白毛の浮禽あまたおひめぐらさむ。さては浮雲の一群れ、つひに墨染のそれとなるもおぼえざるべし。しかすがに、野面見渡せば、青谷の胸より墨雲のたゆたふ天のあたりかけて、狭霧なす鉋色のすぢある知らむを、かくてたやすき舵のうごきによりて、これら浮禽の船は人の頭の上に寄り來て、跳る澤水に、その重荷をおとせば、百花繚きわたり、軒には玉垂のめぐみさはなり。

牛は若草にれがみて、たゆたひ、子らは春雨に笑ひつゝ、樂めり……あるは伏屋の軒の下に、耳かたむけて、おとなひのしと〳〵を聞きぬ。

うなゐの足の歩に似たる……軒の雫のさんさもて、若きわが夢のものがたりこそおこれ。

夏

まめやかなれど心錯てる人の、やゝ、もすれば、清楚なる郊外のひと邑、國奥の木立ある街の類を、またなき田舍世界とおもふこそ憐むべけれ。あらず、わが心あはれみよりはげし。田園の名を、あだとかゝるきはに用ゐるぞ、聖を瀆しつる恐あるべき。

吾世の夏の日毎に思ふ、氏卑して、流水の音近く、樫のさや〳〵のもとに生れたるこそ幸多かれと。こゝら晩年にして、運命吾を導ける現し世のさわぎ、ふみしだきのうちより、われはいく日、いく週のあひだ、忍びいでゝ、ふるき森ののびらかなるに心洗ひ、小河の岸に草しきて若き昔にかへれば、みそらかける白雲の安く柔なるも、一生の穹窿おぼめきわたる聖なるおもひでに似たり。

楓の並木など巧めるえせ村に、せめて田舍などの名を負せむとばかり眞まぐる能はざるこそわが深く天に謝する所なれ。

それは、またさるかたのおもしろさなきにあらず。曾て安息のさまゆかしき町に日暮し、あるは靜けき新英蘭の旅のなかやどに、いこひし風雅も、おもひいださるれど、これらを遙後に殘して、心太くもわけいるの樂しきにしかめや。そこには里ばなれたる農家ひとつ家して澁の人の如く、森陰の山ぶところ、あるは音無の谷の末に集ごもりす。

木影生ひ繁けりたりとも、はた小いさしとも、町にして忘るゝ能はざるは……人なり。その聲、その爭、はた、その煩惱は塗りたる垣の柵に、風に動るぐ逆旅の格牌に又いと心地あしきは美々しく彫りたる辯護士事務所とあるにあらはれたり。せまき小間物の店さへ、麥藁いちらしく、窓さきの糸には作り花のさうび、其ほかの飾りぎぬありて、ならはしの世姿の約なるぞうだてき。

凡べてのこれらより、免るゝこそ樂しけれ。けふのこの日の眞夏に

免れたる如く。靜寧の海に心ひたし、思の浦に泊たるまゝ、わがほとり泛びすぐるもの、花の匂、鳥の聲、雲の影のみなるも、おもしろきかな。

二日の前は、都門の熱に汗ばみて、幾千の心せきたる營み人とおしあひ、石壁のかげに喘きしを、今この清き夏の朝忍び來て、こゝ二時ばかり懷しき昔の健かなるくりかへしに、幼きわれをねむらし、小河の草原に横ふ。ゆかしきそのかみの流よ。變りなく、撓みなく、今も昔ながらの柔聲に老いせずもあるか、銀のさやゝに笑ひ、ひろく靜けく淀みつつ。あゝわれの汝を愛するは、友を愛するが如し。

とはいへ、今ぞ日熾くが如く照りて、熱の波、野中の樫のかげまでも漂ひ來れば、舊るき農舍の一室にかくれぬ。簾、窓にたれたり。されどあさましく切れたるあたりに、遲咲の白石殿數枝をはさめば風の一陣ごとは香にすゞしくなりて通へり。日影一つ二つわが花の帳にさし入

りて微風の梢を動かすまゝに、農舍の樫の床に跳りぬ。

げに細き一の隙より、牧場のひろがりみゆ。野もせの田作は大鎌にかゞみ、身うちふるひ、及ぬぐふ毎に、はがねの光も見え、節ある砥石のひびき、そこはかとなく浮び來るきこゆ。

こゝかしこ、雲雀は深草の床よりたちて銀聲の小球に調そゝぎ出で、とある高木の枝にとまりて、翼ひるがへし、さて風そよぐ若枝に沈みぬ。草原のま垣の方、鶉なくなり。片岡に友どりの答きこゆ。なほ程近く、京燕は梨の老木の梢にとまりて、をり〳〵は刺客のすなるやうに、家土産もたらす蜜蜂をつき、嘴、一聲、舌打して掠奪のまもり再びす。

雛鳥二つ、羽も脚もひろげて日なたにあり。ものうげに嚙啄み、をりをりは羽毛しばたゞきて徒然慰む。刀自めいたる牝雞は靜にものめかしく庭もせを歩み、をりからは枯聲せはしく咿々とぞ呼ぶなる。色

まだらなる唐國鳥こそおもしろけれ、懸きたる雛をあとにしながら、頭しきりにあげさげして、肥える猫をめづらしがりぬ。猫は丸くなりて伏屋の緑に樂ねしたり。

葉籠のひまよりして、田園のことなるたゝずまひ眺めつゝあれば、丘のあなたより遠雷の音すなり。

錫の晷のかげは、子午の線をこえて二時を指しぬ。乳酪の雲の峯は、西の地平の際立てる界に蟠まりて、微風空し。腮なるわが萎みたる枝のかげにだに大氣息ぐるし。いたゞき眞白なる雲はいよ〳〵日に迫りぬ。乳酪の一團もひま〳〵黑みぬ。さきの程は微かなりし遠雷も、今は轟の大音にひろごりて東の丘より、をりかへし、をりかへし響きわたりぬ。

草原の牛馬に人のいひのゝじる聲、間遠にきこゆ。懸きてたつむら

燕、納屋の軒をめぐりてよもに飛びかふめり。

今雲既に中天にとゞき、日は近づける日蝕をかまへて光殊にはげし。澤水の泉より南のかた、淺沼のゆるき流を望むに、西天またく暗の帷をかゝげたるを、天頂までも、ひきあけむとする黄金の網、はやく手繰らるるか、稲妻の長き鎖ひらめきつ。なりまさる雷鳴は滑車のとゞろきに通へり。

天日、雲に過ふまゝ、われは石巖の枝を棄てゝ、破れたる蘢かきわくるに、近づく陰に空は暗し。乳酪のあつぐも隱へる日に彩られ、黄金の末廣きらびやかにして、夕立のへりに轉ずること一時雲上りて華紋消ゆ。稲妻裾に起り、中天に波高みぬ。

野邊こえて田作は牛を追ふなり。おくれたるも耗負ひて從ふ。老いたる牝鷄は廐戸に退きぬ唐國鳥のむれは、羽なみつくろひて小舍の

軒にたゝずみたり。

風は冷に行雲のおもてより落ち、野中の楡は、あらしまだこゝまで來らざるに、動く見ゆ。收場小高きあたり熟穗少しばかり、波だつ海の如く亂れぬ。

しばらくして、風のあらび開ゆ。櫻の、梨の葉かげさやぎて吹き下す一陣に料紙ぞさらはるゝ。

一秒のやすみあり。風さへ倦じ勞れたるか、うらがなしき蛙の枯聲のみ。

忽ちにして、雲間洩るゝ光眩ゆきばかり、鋭き急聲滿天にとゞろき、山山のうちに高く長く響きぬ。かくて大愁歎の苦悶、涙に溢るゝ如くひぢかさ雨こそふりいづれ……芝生に、葉末に、さら〳〵とこぼるれど、軒端のおとなひいとをかし。今は春雨の輕きおとづれならで……年少

のほこりげなる初あゆみなりけり。

秋

秋のけはひの身に泌みて、葉月しもつかた夕影はやく長う傾くほどに、十月狭霧たちこむるやうに、心そこはかとなく悲む人も多かり。

秋は、さはいへど、歳のおとなにして、四季のいと熟せる者にあらずや。花のほこりげなる金莖花、蘭、天竺牡丹、淺沼のろべり、やはさかずや。

果實、はた赤みて、撓はゝなる枝に重く、唐蜀麥の野は、うなだれたる、長莖、ひろく戰げる葉末、實は簇れる半紅の穂を示して、長月の風繁きそのなみゐに笛ふきて、豐穣のさゝやぎあり。蕎麥の莖も蹌めきて紅み、三稜の粒、房やかに頭を點せり。

家畜既に、夏の軛より放たれて、新に刈りたる草原にふとりぬ。卯月の羊、肉置みえて、毛衣日々に殖え、うなづく首宿くさかひつゝ、地づらに

鼻つけて、おごそかにも圓きつどゐなし、牧場の樫の下蔭に集まれば、まひるの日は七月名殘の熱もてうつよ。

南方の米田よりかへり來し禾鶺鳥ぞ班なる。今や春の歌はなけねども、築土のそばに散り生ふる葦の葉を靜に啄めり。黑き黃なる胸當の雲雀は、頭あげて短き草原の上、たけ高く立ち、人の近きに、飛びたちてみそら翔けれど、さて落し來てなほ打仰きつゝ見はりす。鶉は、また幼けき雛鳥つれて、森の下草わけゆきつゝ、人の近づく時のみ、林のかげに散り飛びつ。

前栽は去りて、久しき駒鳥も、夕ざれば、群れとびて、食菜莢の紅き果を食み、眼柔かき鳴も餌をあらそふ。曙に栗鼠のかたらひ繁く、胡桃の熟したる殼に驚ぎ、なまけたる白頭鳥は、牝牛の遲足にともなひつゝ、驚きて危きにたつ蟋蟀をねらひぬ。鴉とびつれて高くなくは岡部にさら

されたる羊のむくろにかゝるか。

楽皮(とねり)は紅葉して、血潮の流に、夏の精氣を失ひ、樺は若枝に黄を匂はし、胡桃は鴉の雨をひるがへして落葉するに山毛欅(ぶな)は霜に凋みながら葉を保てど霜月木枯に一葉づゝ、白みぬ。龍葵(ながばうづき)は葉もなき蔓を木より岩にかけて、堅き果の重みに顚へたれど、ひとり健き樫の樹のみは、風霜にも讓らで、冬の近きを忍びつゝ、其爭のまに橙黄、猩紅、猪肝のいろ〳〵を盡くし、も、つひに木枯の攻にまけて、宛も年少の誇、成人の務にゆづる如く、夏の力の散らふ榮もて土にしきたるに、豐葉の名殘地を温め養ふ。

野原の楓、忽にして、銀の綠を柑子の紅に變じ、秋の夕の寒さ近づくなべに落日の榮を捉ふるに似たり。埃及の昔契り給ひし如く、ひるは雲の柱、夜は火の柱なる神のしるか。

かくて、すべて終りぬれば、都の石敷ける、けた、ましき廻廊に、樗(しんじゅ)綠を

失ひて、秋と嵐との神に骨ばかりなる指あぐるに、女貞(みつぢ)は、まだ冠を保ちて、卯月白妙の枝も、今は紅畑の塔となりて、落葉の森にゐより、炎上のたち木なりけり。

爐びらきの樂しき溫みは秋の家土産ぞ。心を夏の大やかなる歡びの景色より曳きて、家ぬちに咲笑ふかず〳〵の物に注かしむ。夏の間は枝花に亂れたる爐も、けふその婆みたる家借をすてつ。鐵架(ぢく)親しげに夜にほゝゑみ、わが家のゐろり火につどふうれしき望、祈など折たく柴にさめいづ。

すぎしをりふしの戲れ、すさびも、心おぼえに柔く浮びて、來む時のたのしび草となり、宛も年少の客氣、成人の追憶を暖むるに似たりや。

まひる、氣うらゝかに柔く溫き靑烟、山のかひにたなびき、遠里小野の森の綠は、もやにかゝりて夢心地なるきらびやかの彩をたゞよはせた

り。河は八月の旱に淺く、礫の床に、柔きつぶやぎして怨ずるに、水際の失鳩答草は、尖りたる光に聳えて春のものがたりす。

十月の霧に輪影倍して、日傾けば、音低き南風萎みたる梢をわたり、落葉の音繁し。ひるのほどは、あけ放ちたる窓の戸も閉され、あらしを約する東風のしめり逐はむと、ゐろり紅くもえあがりて、壁のおもての書ども、半身像などを親み照しぬ。

日いよ、沈むなべに、赤影は大なる鈍色雲の海にきえ、靜けく徐に、雲は夜のそらにはびこりぬ。こよひ、ゆふづゝくらし。西天の星かすかにしばたゝき、やがてたちこむる霧にかくれぬ。風見は東南を指せり。天頂の星宿、しばしあらはれむと爭ひしが、これもやがて光芒收めぬ。

更けゆく燈火のもとに、空はくもりて暗し。風見は二位ばかり東せり。雲は細雨吐けども、そらうち仰ぐとき、はじめておぼゆ。されど漸

にして繁く、重く、ゐろり火打守りて夢心地なるを、風の吹くまゝに、窓のおとなひも、さんさめきて、……成人の軍のはやあしの如しや。

冬

靜々と、徐に、絶間なく、雪はふるよ。……人の世に歳月の積る如くに。はじめは、草むらの蔫の席になくなり、あるは戸口のひろき飛石に落ちて、靜に消えぬ。されど時は時とふるに從ひ、鵝毛の雪片は、草原に、しるき白妙の袿をひろげ、集まりて階を冷しつゝ、眞珠の筵その上にしきたり。

乾きたる草の穗は、白衣を貫きて、その數の鎗のつらねと見ゆれど、ふりつむまゝに、ひとつ〳〵雪のおくつきに沈み、やがては、さしも大軍の名殘、黑みて萎む雛菊のあるかなきかの旗指物となりにけり。

わが窓につゞく廣野をかけて、さしも夏は綠なりし小山もわかず、そ